

パソコン文字通訳研究会主催 冬のイベント
～利用者と入力者がお互いを知るために～
報告書

日時:2025 年 1 月 26 日(日)13:30～16:30

会場:Zoom ミーティング

主催 :特定非営利活動法人 全国文字通訳研究会

目次

開会挨拶	1
意見交換	3
論点 1. 要約について	5
【会場からのご意見】	11
(参考) 利用者からの意見	18
(参考) 入力者からの意見	19
論点 2. 養成について	21
【会場からのご意見】	23
(参考) 利用者からの意見	26
(参考) 入力者からの意見	27
論点 3. ログについて	29
【会場からのご意見】	29
(参考) 利用者からの意見	30
(参考) 入力者からの意見	31
論点 4. 利用者との対話について	32
(参考) 利用者からの意見	34
(参考) 入力者からの意見	36
論点 5. 音声認識について	38
(参考) 利用者からの意見	40
(参考) 入力者からの意見	41
その他の意見交換	42
閉会挨拶	44
付録	46
「情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」概要	46
イベント中にアンケートフォームに寄せられたご意見	47

お問い合わせ先：特定非営利活動法人 全国文字通訳研究会

FAX 050-3588-8866

メール info@mojitsuken.sakura.ne.jp

ホームページ <https://mojitsuken.sakura.ne.jp/wp/>

※無断転載を禁じます。

開会挨拶

宮田理事長 皆さん、こんにちは。大谷翔平です(笑)。

今日は大谷翔平と言おうか、鈴木イチローですと言おうか迷いましたが。見事アメリカの野球の殿堂に入って今話題の人なので。もしかしたら佐々木朗希ですと言ったほうがいいのかな。ドジャースと見事に契約しました。25 歳以下だとメジャー契約ではなくマイナー契約になるらしいですけれども、アメリカで活躍するのではないかとということで、そういう名前もひらめきました。いつも同じってというのは、なんとなく安心するということもあるんですね。

今日のお天気は快晴で、今朝、東京のわが家の窓から真っ白な富士山がきれいに見えました。ここへ来る途中の高速道路からもきれいな富士山が見えました。富士山がきれいに見えると安心するというのは、やはり日本人なのかなという気がします。いつも日本の真ん中あたりにドーンと構えている富士山は、何となく心の安まる存在だなという気がします。

前置きが長くなりました。

何年か前に私の大先輩がこの文字通研のイベントに参加してくれました。そのときに、「この文字通研がどういう活動をしているのか」と聞かれました。「話されたままを知りたいのが私たちの願いなので、それをかなえるために活動している」と説明しました。「いつからやっているんだ」と聞かれました。そのときはまだ 10 周年を迎える前でしたので設立からの年数で答えました。

そうするとその大先輩は、「そんなに長くやってるのか」と言われたんですね。つまり、「そんなに長くやってるのに、君たちの願いはまだかなわないのか」という意味です。そのとき私は、確かに随分長くやっているなと思いました。

昔の大先輩たちは、聴覚障害者が置かれている差別とか、不条理とか、いろいろなことに対して激しく活動していました。もちろん時間がかかったものもあると思いますが、10 年近くも同じことを言い続けていて、そしてまだかなわないということは、そうはいんじゃないかなと思ったんですね。

情コミ法（情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法）というものが 2022 年 5 月に施行されました。そこにはっきりと、話されたままを知りたいという私たちの願いは、当然の権利として認められるという内容のことが明記されています。つまり、国会でちゃんと認められて、法律として成立している内容なんですね。それが実際の現場では無視されている状況なのです。

ですから先ごろ、臨時に発行された会報第 41 号の「年頭にあって」という挨拶として、かなり過激なことを書いてしまいました。そろそろはっきりさせないとまずい時期なのではないかと思ったんですね。

文字通研としては、8 年前の 2016 年と昨年 2024 年に全国の利用者にアンケートをとっ

て、こういった形が望ましいかということをお聞きしました。いろんな意見がありましたけれども、やはり話されたままを知りたいとおっしゃっている方が非常に多い。ケースバイケースも含めて、とにかく、話されたままを知りたい。どういう言葉を使ったのか、どういう言い回しをしたのか、どういうニュアンスなのかを知りたいという利用者はたくさんいました。確か90%以上が、そう望んでいる。

にもかかわらず現場では相変わらず一人入力で、かなり要約された内容で入力されて表示されている。ずっと私たちは、私たちの希望する文字通訳ではなくて、意味が分かればいいだろうという、まあ、馬鹿にされているような感じですね。細かいことまで伝えなくてもいいだろう、大体の意味がわかればいいだろうという程度にしか思われていないのかなと感じてしまいます。

この現状をなんとかしたいと思っています。もう限界かなと。おとなしい手段をとっていたのではちが明かないのかなと思って、年頭にあたっての挨拶として書いたんです。大きな拍手だと言っていたいただいた方もいらっしゃいます。

もちろん、いきなり強硬手段に出るつもりはないんですね。行政担当の方や関係団体の方々と話し合いをして、なんとか穏便に、「話されたままを知りたい」という私たちの願いが実現できないかということをご相談させていただく。それでもちが明かないような状況になった場合は、強硬手段に出なければいけないのではないかな、もうその時期に来ているのではないかなと感じました。

今の状況は、こういった集会に自分の顔は出せない、名前も出せない、他のところにバレるとまずい。そういった状況というのは絶対よくないですね。堂々と自分の意見が言えるような状況でなければいけない。入力者の皆さん、多くの皆さんは私たちの意見に賛同してくださっているんですけども、やっぱりそれを、大見得切って言ってしまうと、いじめられるとか、仲間はずれにされるとか。現に私の身近なところで、そういった現象が起こりつつあります。

とにかく私たち利用者が望んでいることは当たり前のことで、当然、かなえられるべきだと認めていただいて、それがどこへ行っても自然な形で通るような世の中になってほしい。そういうことを強く望んで、あの挨拶文を書かせていただきました。

今日は皆さんに、忌憚のないご意見を聞かせていただきたいと心から思っております。日本人は結構奥ゆかしい方が多くて、心で思っているけど、なかなか口に出して言えないという人が多いですね。ましてや、行動に移すことはなかなかできない。でもこの際、ハッキリさせたほうがいいんじゃないかな、と思います。

堅い話が長くなって申し訳ないですが、そういった意味も含めまして、今日のイベント、皆さんからの本当に忌憚のない意見を述べていただき、それをまとめて、しかるべきところに持って行って、話し合いを始めたいなと思っております。とにかく待ってられない状況だと思います。強く激しく活動していきたいなと思っております。

意見交換

進行・大場 本日のテーマは、「利用者と入力者がお互いを知るために」です。

この夏に利用者の意識調査を行いました。その8年前、2016年にもほぼ同様の調査を行いました。相変わらず状況は全然変わってないことや、不満に思っている方が非常に多いと明らかになったわけです。

一方、入力者の方にも言い分があるはずです。そこで、担い手のアンケートを行いました。どういう意見が何件、何パーセントという性質のものではなく、この件について、どう思いますか？と、すべて自由記入していただきました。答えるのは非常に難しかったかと思いますが、思ったより多くの方が協力してくださいました。ありがとうございます。

皆さん、問題意識を持っていらっしゃいました。昔からこの活動をしている方もいらっしゃれば、地域で指導者的な位置にいらっしゃる方など、割とベテランの方が多かったです。皆さん一様に、このままでいいとは思っていないということです。

先に、今朝私がもらったメールの話をしようと思います。ある地区のパソコン要約筆記者の方からいただいたものです。

- ・ 「私たちが大幅な要約をするため、利用者からの不満、主催者への一般参加者からのクレームがあり、派遣依頼自体が大幅に減少しています。それにともない、養成講座の受講者も激減です。当事者がどうなるの？と心配していましたが、難聴協会の方々は音声認識でなんとか支障なくやれているらしい。
残念ながら要約筆記者は必要なくなったのかなと思っています」

もうすでに、利用者から見放されている？ こんなことでいいんでしょうか。

さて、そういう問題意識を共有したうえで、一つずつ論点ごとに話を進めていきたいと思っています。

主な論点として5つ出しました。

主な論点

1. 要約について
2. 養成について
3. ログについて
4. 利用者との対話について
5. 音声認識について

まず、1番目の論点は要約についてです。これは、文字通研でもずっと言い続けているけれど解決していない問題。

2 番目が養成についてです。利用者の要望に応えられないのは、入力者のスキルにも問題があるのか。あるいは養成の研修会に問題があるのか。このような問題意識で入力者の方にご意見をいただいています。

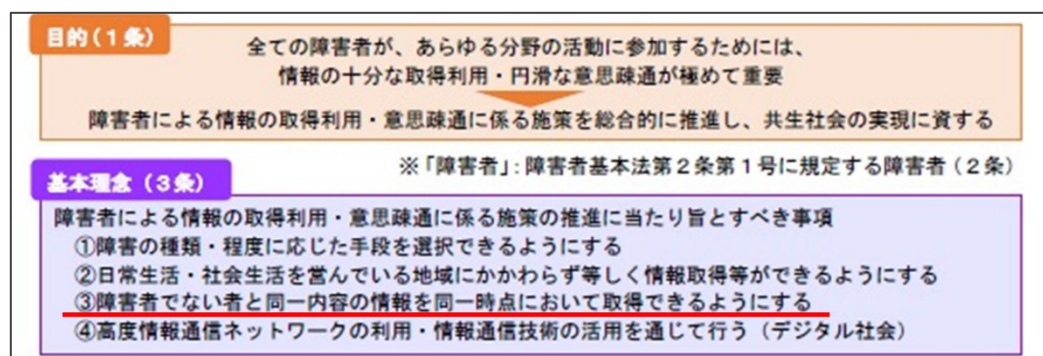
3 番目はログについて。ログは一切、提供してはいけませんという方針があり、利用者がどんなに要求しても、頑として提供されないという現状がある。けれども、地域によっては、柔軟に、一定の約束事をしたうえで提供しているところもあるのです。

4 番目は、利用者との対話について。障害者の施策はここ数年でがらりと変わっています。キーワードの一つは合理的配慮です。合理的配慮とは、利用者とサービスの提供者が建設的な対話をして解決していくべきであるという考え方ですね。その対話についてです。

5 番目は、音声認識について。先ほど紹介したメールにもありましたけれども、「こんなに要約筆記者が言うことをきいてくれないんだったら、音声認識でいいじゃん」というふうになりつつある。いやいや、でも、人間による支援はまだ必要ですね。

このような問題意識で始めてまいります。

先ほどの宮田理事長のお話にあった情コミ法について説明しておきます。2022 年 5 月に「障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」（略して「情コミ法」）ができました。



（出典：内閣府 <https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/jouhousyutoku.html>）

基本理念の③に「障害者でない者と同一内容の情報を同時点において取得できるようにする」とあります。

「同一内容の情報」と書いてあるのです。

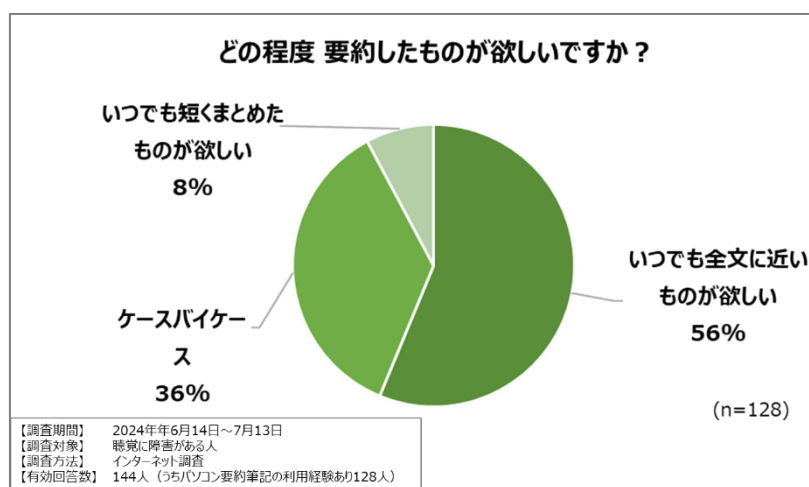
現在行われているパソコン要約筆記はこうなっているのでしょうか。

論点1. 要約について

まず、パソコン要約筆記の利用者意識調査の結果をご紹介します。

【求める要約の程度】

「どの程度 要約したものが欲しいですか？」という問いに対して、「いつでも全文に近いものが欲しい」が 56%。「ケースバイケース」、36%。合わせて 92%の人が全文に近い文字通訳を望んでいることが分かりました。これは 8 年前の調査でも同じような結果でした。



【困ることや不満なこと】

次に「パソコン要約筆記を使って、困ることや不満なことは何ですか？」という問いです。複数回答で聞いています。

ダントツの1位が「表示が遅れる」でした。

これはパソコンの宿命ではあるのです。話を聞いてから入力し、漢字に変換し、それから表出するというプロセスがありますので、どうしても遅れるということはあります。ただ、そうではなくて入力者のスキルのせいかもしれません。

2 番目、3 番目が要約についての不満です。

「冗談などが省略されてみんなが何を笑ってるのか理解できない」

「短く要約しすぎていて、話の繋がりが理解しにくい」

冗談は入力してはいけませんと指導されているんですね。講演のテーマに関係ない話は入力しない。短い言葉で言い換える。そういった指導がされているわけです。これができないと、試験に受かりません。

私もよく体験します。ある講演会にお客さんとして参加したとき、講師の方がちょっと

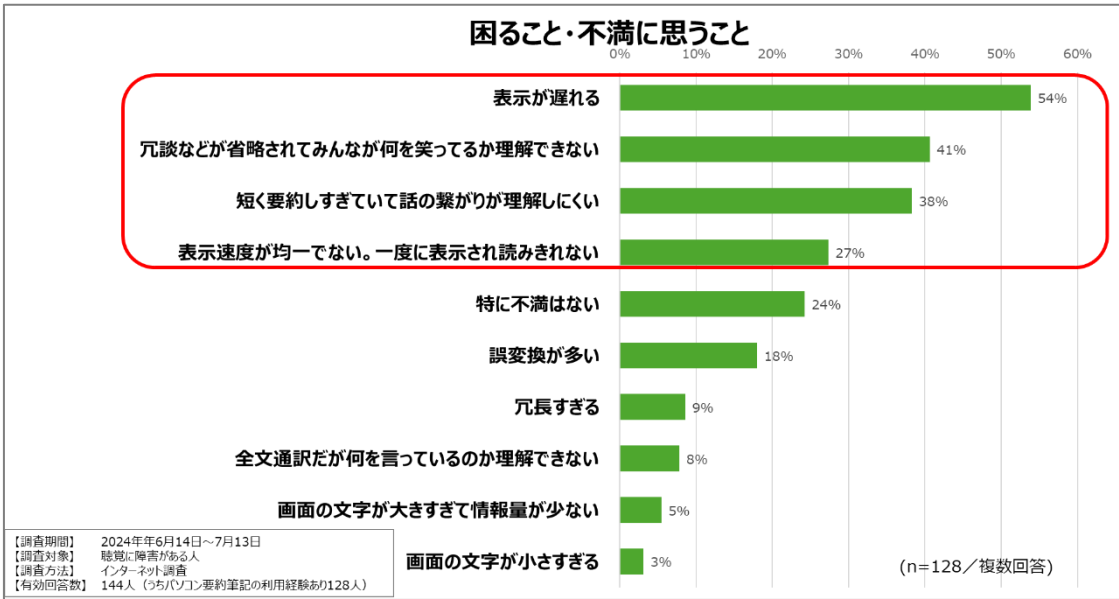
冗談を言いました。さほど大笑いするほどの冗談ではありませんが、今話している人はこんなに面白い人なんだと親近感を持つような、ちょっとした冗談でした。

手話通訳を見ている人は、ちょっと笑いました。

聞こえている人もちょっと笑いました。

スクリーンの要約筆記を見ている人だけ、笑いませんでした。

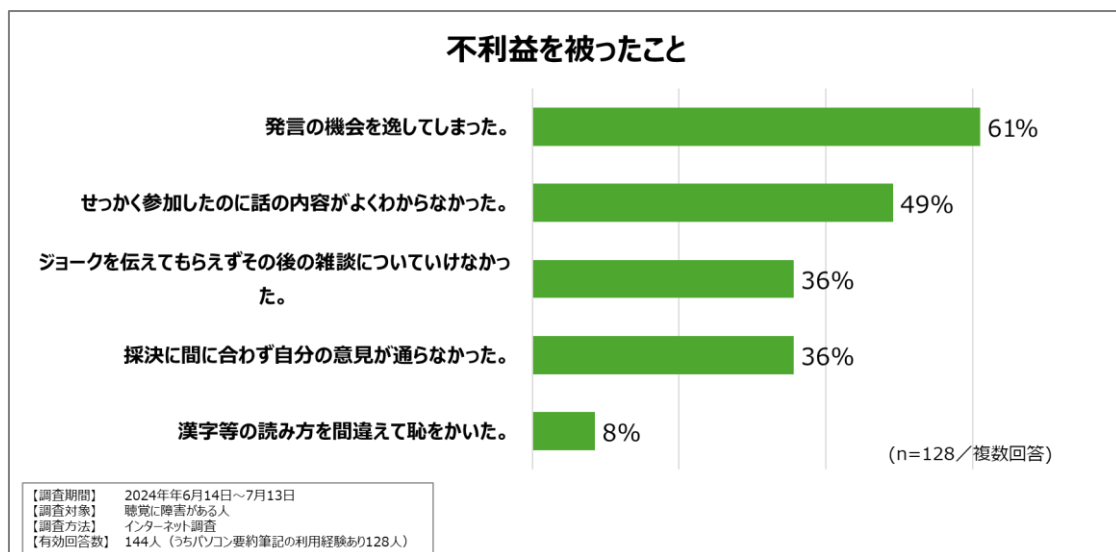
すごく居心地が悪かったです。



【不利益を被ったこと】

次に、「不利益を被ったことはありますか」という問いです。

「発言の機会を逸してしまった」がダントツでトップ。「せっかく参加したのに話の内容がよくわからなかった」「ジョークを伝えてもらえず、その会が終わったあとの雑談についていけなかった」などが上位にあがりました。今日の講師の人、本当に愉快的な人だったよね。そんな感想を持つことができなかった。また、「採決に間に合わなかった」など。



具体的には、こんな声が届いています。代表的なものだけピックアップします。

- ・ 「利用者には全文を聞く権利があるので全文は必要ないというのは横柄でしょう」。
- ・ 「話し手のニュアンスをできるだけこまめに表出を心がけてほしい」。
- ・ 「要約する必要があるが、感情などは伝わりにくい」。

でも、肯定的な意見ももちろんありました。

- ・ 「要約してもらうことで、安心感がある」。

入力者のほうはどうでしょう。代表的なものでは…。

- ・ 「要約技術が不十分な場合、聞こえた箇所だけを入力するといった稚拙な文になり通訳として通用しないことがある」。

要約には技術が必要です。タイムリーに出すには、入力速度も必要ですね。
他にはこんな声が届いています。はっきり書いてくださっています。

- 「問題は全要研の『要約が正義である』という価値観だ」。
- 「利用者ファーストに考える、パソコン要約筆記者との間に考え方の大きな溝がある」。
- 「全要研において手書き要約筆記の枠内で捉えられているのが根本の問題」。

いただいた事例からいくつかピックアップしてみます。

利用者からは、

- 「要約しすぎて知りたいことがわからない」。
- 「ろう者の方と同じ会議に参加したときに要約筆記はこれだけ？と言われました。短すぎてびっくりしていた」。

入力者からは、もっと悲慘な声が聞こえています。

- 「対象者1人のノートテイクで（要約）の要望に応え、報告したら派遣元から激しく叱責された」。

利用者1人の現場です。どのぐらい要約するのがいいですかとお聞きし、その要望どおり全文に近い入力を努めておこなって、報告書にそう書いたところ、叱責された。怖いですね。全要研としては全国おしなべて同じサービスをやりなさいという方針なんですよ。個別の対応はしてはいけませんということでしょう。以後、この人は報告をせずに、独断で同様の対応をしていますとのこと。

もう一人の方。

- 「短く要約されすぎることには不満を持っている利用者の方が何人かいらっしゃいます。理想と現実のギャップに悩まされています」。

入力者は、わかっているんです。でも、そういう行動を取ると、派遣に出してもらえないことがあるとお聞きしました。活動できない、外されるそうですよ。

【「要約筆記」という名称について】

入力者の方に「要約筆記」という名称についてどう思いますかと聞いてみました。この名称がよくないんじゃないかという問題提起をいただいたからです。

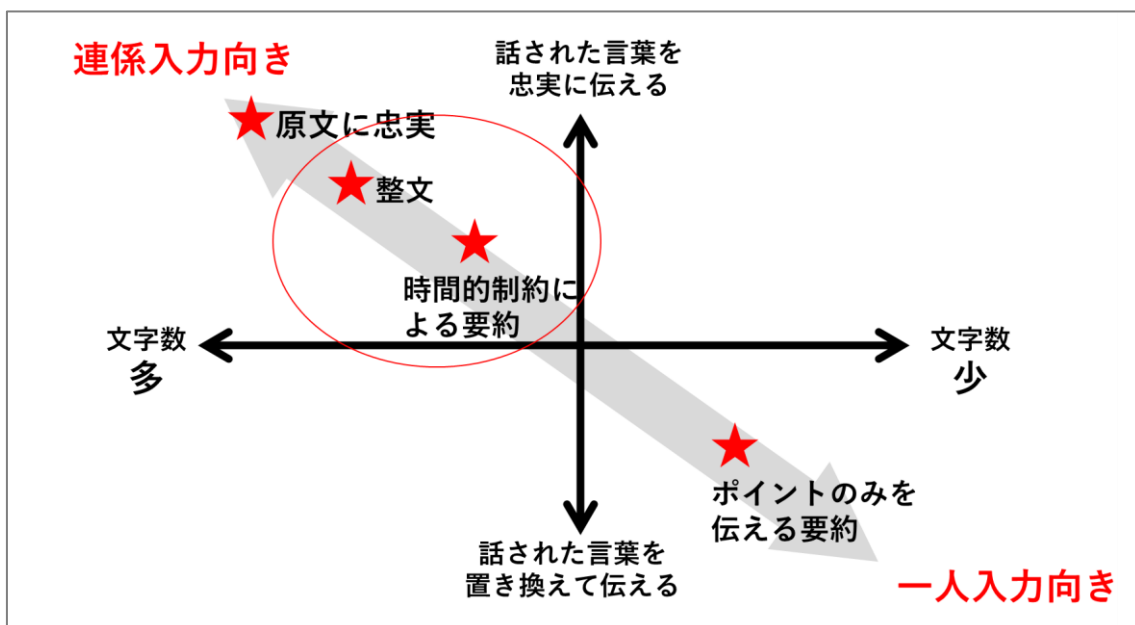
「パソコンの場合は、要約筆記という名称は、ふさわしくないのではないか。この指摘についてどう思いますか」と聞いた答えがこちらです。

ほぼ全員の方が、同感だ、そのとおり、とお答えになりました。

- ・ 「『要約』という言葉が支援方法を限定して使われることが問題」。「福祉施策で『要約筆記等』とあるが、全文に近い入力でも当然『要約筆記等』」。
- ・ 「名称を『パソコン文字通訳』に変えない限り、全文に近い通訳を求めることにはならないと思います」。
- ・ 「『要約』の言葉が、情報欠落の免罪符になっている」。
- ・ 「『要約』の単語の意味に過剰に引っ張られ、要約ありきの入力になると、利用者の『全部知りたい』要望から乖離する」。

ところで、この要約という言葉について、皆さん、イメージはまちまちですね。手書きの要約筆記の方が考える要約と、世間一般の人が考える要約は全然違います。

なので、文字通研では、このような図に整理しています。



出典：「パソコン文字通訳(要約筆記)者 養成テキスト」

横軸が文字の多さです。右にいくほど文字が少なく、左にいくほど文字が多い。縦軸は、話された言葉に忠実か、他の言葉に置き換えるか。上にいくほど原文に忠実に伝える。下

にいくほど置き換えて伝える。

手書きの場合は右下に当たります。「ポイントのみを伝える要約」です。かなり積極的な要約です。パソコンでは一人しか入力者がいない場合の一人入力向きです。連係入力での「ポイントのみを伝える要約」はできません。

一方、左上、原文になるべく忠実に入力するけれども、話し言葉をそのまま文字にするとうわかりにくいので、少し整える。これを整文と言います。

それから、時間的に入力が間に合わないということがありますよね。その場合は、やむを得ず要約をする。これは話に追いつくための手段。手段としての「時間的制約による要約」です。

右下にある「ポイントのみを伝える要約」は目的です。手段と目的は全然違います。なのに「要約」という言葉が曖昧に一緒くたに論じられているので、おかしくなっちゃうのかな、と私は思います。

左上の丸で囲んだところが連係入力向きです。ポイントのみを伝えようとか、話された言葉を別の言葉に言い換えようということはしませんので、連係入力ができます。つまり、全文に近い入力ができるということになるわけです。パソコン入力のよさを生かすのにふさわしいのはこの方法です。

【会場からのご意見】

大場 ここからは論点1の要約について、ご意見をいただきたいと思います。ご意見のある方は挙手ボタンを押してください。アカウント名は匿名やニックネームでもかまいません。顔を出すのはちょっと…という方はビデオオフでもアバターを使用してもかまいません。チャットやアンケートフォーム※に書き込んでくださってもかまいません。

(※アンケートフォームに書き込まれた意見は巻末に記載)

～ 神奈川県では難聴者ファースト ～

森(利用者) 神奈川県の森です。神奈川県には3つの協会があるんですけども、私は、横浜と川崎を除いた県域の神奈川県中途失聴・難聴者協会に所属しています。幸いうちの方は、お話に出ていたような問題はありません。

というのは、うちの協会と、情報提供施設である聴障センター（神奈川県聴覚障害者福祉センター）、神奈川県要約筆記協会の三者で、要約筆記のあり方やログの問題を議論した結果、利用者の立場優先、難聴者ファーストで進めていくという考え方のもとで進められているからです。

手書きはもちろん要約筆記になりますが、パソコンの要約筆記は連係入力で講習会の指導が行われています。もちろん一人入力から始めて最後のほうでは連係入力を取り入れています。理事会などはオンラインでやっているんですよね、自宅で入力して、連係入力で行っています。他の地域で行っているかはわかりませんが、神奈川はそこまでやっています。

それから、要約筆記協会も利用者の立場を尊重しています。一番大事なのは、講習会を取りまとめている情報提供施設の考え方が全文入力、連係入力。ニュアンスを大切にするとか、あるいは聞こえた音はすべて入れるようにと、そういう細かいことも指導してくれます。ですから、我々としては非常に過ごしやすいかと思っています。

東京の方や同じ神奈川県でも川崎、横浜はちょっと違うなと思います。一応連係入力を取り入れています、ちょっとスキルが違うなと、ちょっと気にはなります。そういう面で、神奈川県は非常に恵まれています。他の地域の方は、かわいそうだなと思います。同情しちゃうというか。

講習会のテキストは全要研・全難聴のものは使っていません。神奈川県要約筆記協会の講師の皆さんが、毎年テキストを作っています。ですから、試験は統一試験ではなく独自試験で行っています。採点や審査会も、すべてセンターと要約筆記協会と難聴協会の三者で委員会を開いて審査をしています。そこで合格した人を登録します。

もう一つ大事なことは、これは聴障センターが言っていることですが、今、要約筆記というのは、日本にまだ浸透していないという考え方があるわけです。その原因は、要約筆記を知らない人が多いということ。知らせることを利用者や要約筆記者、協会、センター

もやらなければいけない。講習会を受ける人にはできるだけ講習会を受けやすくしている。落ちて構わない。もし落ちてしまったら地域の地域でボランティアでもいいですから、知らない人にもそれを教えてほしいと、センターの職員が言ってくれるんですね。

地域の人にも、要約筆記あるいはパソコン文字通訳の良さをもっとアピールしていかなければ。当事者や入力者の悩みは何かしたいとは思いますが、我々神奈川としては、もっと地域に広めていくこと。今の要約筆記のあり方、全文入力を維持していくことが大事だと考えています。

要約筆記のやり方がおかしいから、要約筆記じゃなくて、音声認識でやるとなってしまうわけです。先ほど大場さんもおっしゃっていましたが、その通りだと思います。今は若い方は音声認識を使っていますし、(Zoom の) 画面の下の方にも出ていますが、結構、誤変換も多いですね。技術がアップしたらこれ以上良くなるのか、わかりませんが。むしろ要約筆者と一緒に現場に行ったほうが心の安心が大きい。何度も利用して非常に安心します。ですから、要約筆記をどんどん利用して、その良さを知ってもらおう。そういうことをしなければいけないと思っています。

大場 ありがとうございます。

神奈川がすごくうまくいっている。聴覚障害者の要望に沿った形で運営されていることはずっと前から聞いていて、うらやましいと思いながら聞いていた方もいたかと思います。

この次の論点が養成についてなので、そこでもう一回、具体的にどんなふうにやっているかをお願いします。

～ 要約筆記は一つじゃない ～

匿名(利用者) 私はまだ難聴者の世界に入って短いというか、コロナの頃に入ってからです。補聴器があればある程度聞こえるので、難聴者の協会があることも知らなかったし、要約筆記というものもまったく知りませんでした。

要約筆記というものを初めて体験したときは、聴力が残っているので、遅れるし、まとめ過ぎちゃっていて、情報として入らないので、要約筆記は使えないと最初に思っていました。ですので、文字通研というのを知って、これは私に合っていると思って参加することにしました。

それから7年ぐらいたっているんですけども、要約筆者とも接することもある。何というか、制度、人間関係というか、わだかまりとか、これってどうにかならないの？というのが今の気持ちです。

神奈川県とは違って、私が入っている難聴協会是要約筆記が一番なのです。本当に、全要研そのものです。全要研様々みたいな感じです。だから神奈川県がうらやましいです。連係入力なんて全くありません。パソコンでも要約です。

どうしたら神奈川県のように変えていけるのか。難聴協会の方々も要約筆記と一緒に活

動を進めてきたので、要約筆記の方が変わらないかぎり、なかなか難聴者としても言えないところがあると思うんですね。

ただ、突発性難聴とか病気で全く聞こえなくなった人にとっては、やはり要約筆記は大切なんです。どれか一つじゃないということを最近よく感じます。

要約筆記は、こういうものだとかだわらないで、さっき言われた難聴者ファーストの考え方に、全要研や、それから私のいる県でも、変えていってもらうためにはどうしたらいいかということを聞きたいです。

私がアンケートに書いたのは、ろう者と一緒に参加したときに、ベテランのパソコンの方だったんですけど、本当に要約しちゃっていた。私、手話もちょっと勉強しているので、手話通訳さんがわーっと表現しているのも分かりました。ある程度聞こえているので、たくさん話していることも分かったのですが。本当にまとめて表示されていて、私もえーっと思いました。

大場 森さん、どうしたら神奈川県のように変えていけるでしょうか？

最初から利用者ファーストで始まっていた、そのために議論なされたということですが、そのときは、どういうメンバーでどんな議論をなさっていたのでしょうか？

また、他の地域にアドバイスがあれば、お願いできますでしょうか。

～ 神奈川県では地域に合った講習会ができている ～

森 私が協会に入会したのは、10 年ぐらい前だと思うので、その前から神奈川方式というのは、もう決まっていた。関係入力とか、決まっていたんですね。

話を聞いていると、センターの職員と、うちの 2 代前の会長、それから当時の要約筆記協会の会長ですね。おそらく 12～13 年前の話だと思うんです。私が入会する前なので、伝え聞きで申し訳ないですが。

統一試験の問題から講習会のあり方、カリキュラムのあり方、講師は誰を呼ぶかなど、そういうことも毎年毎年、委員会の中で、話し合いをしています。それを進めるのは、県から委託されている聴障センターです。そこが先頭に立ってやってくれています。我々の意見を難聴者の立場で話してくれるので、問題が起きないのは、そこだろうと思います。もちろん、要約筆記協会も先進的な考えの人がいらっしゃいますので、利用者の立場ということを皆さん言ってくださっています。我々はその状態をずっと維持しているので、安心できます。

パソコンはどんどん進化しているのに、逆に他のところがなんで一人入力でやっているのだろうか。できなかつたら、どうすべきかを考えるのが本当は大事だと思います。神奈川はそこを、しっかり考えていますね。そこがすごいなと思います。

講習会の話ですが、共通講義というのはありますが、全要研とか全難聴の講師は呼んでいません。難聴者の歴史や要約筆記の歴史、あるいは対人援助まで、全部、我々協会がや

っています、私もやっていますけれども。例えば難聴者の歴史で、地域で最初にできた要約筆記サークルはどこかというような話もするわけです。全要研ではそういう話は多分しないと思うんです。地域に合った講習会です。その地域によって事情が違いますから、いろいろ独自性を出してやればいいんじゃないかと、逆に思うんですけどね。

申し訳ない、自慢話のように聞こえるかもしれませんが。逆に神奈川のようにやっている県が他にあれば教えてほしいなと思います。

～ 問題はテキスト、講習、試験 ～

寺井(手書き要約筆者) こんにちは。神奈川の要約筆者です。

今の状態になったというのは、そもそも聴覚障害者センターができたときに、要約筆記担当の職員さんがいらしたことが、とても強いのだと思います。

話し言葉を大切にするようになったというのは、昔、難聴の方々の会議があったときに、要約筆記のスクリーンを見て、会員さん同士がけんかになったからだという話を伺いました。「言った」「言わない」という問題が、要約筆記のスクリーンを通したことによって起きたのではないかと。ということで発言者の言葉を大切にすることを利用者の方々が強くおっしゃった。それを受けた要約筆者と情報提供施設のセンターが、しっかり頭の中に入れて、必ずご意見を伺うということを肝に銘じたんだと思います。

連係入力が始まってそれが根付いているというのも、手書きの要約筆記が二人書きがずっと続いている。その流れを受けて、ということです。それも話し手の言葉を大切にすることで、流れがつながっているのだと思います。

要約筆者として考えることは、ニュアンスは大事、文章の最後の語尾が大事。そういう考え方は、しっかり肝に銘じています。

今、各地域で連係入力が難しいという原因は、試験ではないかなと思っています。試験が始まる前は、各地でも連係入力をやっていた地域もあったはずなんです。ですが、いざ試験を受けなければならなくなったとき、協会が試験を実施することの大変さが表に出てしまったのだと思うんですね。それで、試験ができなければ全要研がする統一試験を受けなければいけない。では、講習会も同じ流れでやる。そういう流れなんだろうなと思います。

神奈川が連係入力や手書きの二人書きが続いているのは、試験を独自で実施しているからだと思います。それがなければ、テキスト、講習会の内容、試験、この3つは、どうしても全要研の流れを受けざるを得ないんだと思います。

できれば、地域の要約筆者の団体、それから、難聴者の協会が力を合わせて試験をやってみようという意味を表明なさったら、少し変わっていくのかなと思っています。

大場 ありがとうございました。どうしたら解決できるかの方策までいただきました。

～ 連係入力で講習を受けた人のための試験があるといい ～

工藤(パソコン要約筆者) あまりに森さんが神奈川県を褒めすぎるので、ちょっと褒めすぎだということを言いたかったんですけど。

確かに神奈川県の実域のやり方は連係入力で、本当に難聴者ファーストで入力しているのですが、全員が全員、個人スキルがあるわけではなくて。連係だからこそ見えないだけで。もう少し同じレベルで打てば、もっと情報が入ると思うんですよ。だから、今後レベルを同じぐらいにまで上げるのには、どんな研修会等をやればいいのかと、今悩んでいます。私が今回参加したのは、他の地域でも連係入力されているところがありますよね、そういうところはどんな感じで現任研修をやっているのかを知りたかったからです。

先ほど寺井さんの話にありましたが、私の地元は県に準じる養成をやっていたので、試験も独自に地元で難聴者さんと一緒に作っていたんですよ。でも、あまりに負担がかかりすぎてどうしようといったときに、市のほうが、じゃ、統一試験を導入しましょうかという話になったのです。それだと私たちが今までやってきたことが無駄になるから、それはやめたい。それで私が実域の聴障センターの試験を受けられる形に持っていけないかと話を投げかけまして、ここ数年、県で試験を受けさせていただいています。

森さん、あまり神奈川を褒めすぎないでね、他にすごいところもあるですよ。

～ 京都市も優秀だが試験がネック ～

橋本(利用者) 今まで神奈川県の実域話をいっぱい聞かせてもらったんですが、私はちょっと神奈川県をうらやましいとは思いません。

というのは、私が住んでいる京都市はたぶん全国で2番目だと思っています。1番目は、この文字通研の連係入力です。本当に文字通研はまじめな団体で、非常にすばらしいんです。ここに参加している皆さんで、まだ文字通研の会員になっていない方もいらっしゃると思いますが、ぜひこの機会に、文字通研にご入会して下さるよう、お勧めいたします。もちろん私も会員です。

本題に戻ります。

京都市でも一つ困っている問題があります。それは、パソコンの養成講座では連係入力を中心に教えているんですが、試験は一人入力なんです。

なぜかという、京都でも独自の試験をやっていますけれども、パソコンの連係入力のスキルを検証する試験というのをうまくやれないんですね。どうやればいいのか、いろいろ考えていますが、適当な方法がまだ見つからない。養成講座では連係入力を中心に。パソコンの認定試験では一人入力。この方法でやっています。

認定試験に合格しないと現場に出られない。そこで試験前に、急遽一人入力の特訓をやっていますけれども、時間が足りない。そういうことで毎年京都市の合格者は少ないんです。

パソコン要約筆記のニーズは非常に大きいのですが、パソコン要約筆記者が少ない。そういうことで、パソコン要約筆記の派遣を申し込んでも人がいないという理由で手書きにかえられることがしょっちゅうあるんです。そういうことで困っていますが、神奈川では非常にうまくいっているそうですが、神奈川でパソコンの実技試験はどうやっているか？ それを伺いたいと思います。

～ パソコン要約筆記者に発言権がない悩み ～

匿名(パソコン要約筆記者) 県で要約筆記をやっています。

担い手アンケートに「そもそもパソコン要約筆記が手書き要約筆記から派生し、全要研において手書き要約筆記の枠内で捉えられているのが根本の問題に感じています。養成テキストや認定試験も手書き主流の考え方で、それに則った『認定試験に合格した人は要約筆記者として活動できる人』と考える自治体の派遣元と、利用者ファーストに考えるパソコン要約筆記者との間に考え方の大きな溝があると思います。」という意見を出した者です。

意見は6点ほどあります。

まず1点目に、会報41号特別号の宮田理事長の言葉にとっても感銘を受けました。利用者さんの思いをしっかり受け止めました。完璧ではなくても全文を伝えようとする気持ちがあれば伝わるとか、それに向けた気持ちが大事ということがすごく響きました。

次に2点目です。神奈川県のお話、森さん等のお話を聞いて、うらやましいと思った者です。しかし自分の県では、試験を作れる、採点できる人材が不足していると感じています。それぞれ地方には段階があると思いますが、そのような試験を作れる人材がそろっていると、または、連係入力ができる人はいますが、派遣にも出て、講習会もやり、試験も作り、採点までするというのは、手が回らないところがある。私たちが的には問題はそこだと思っています。

3点目、私が住んでいるところの話をさせてください。

パソコン要約筆記のサークルが県内に3個、4個あります。昨年度までは、そのサークルに依頼されコーディネートを行っていました。それが今年度からコーディネート体制が変更され、派遣元のコーディネートに変更しました。

それぞれのサークルにはそれぞれの考え方がありますが、自分のところは、利用者ファーストというところに重きを置き、少しでもいい情報ができるようにみんなで目指してきたサークルです。私たちがよりよい情報保障ができるようにこのようにやってきた、ということヒアリングしてくれると思ったら、まったく何も聞かれなかった。ずっと待っていて、昨年度末ぐらいにおかしいと思って、逆に言いにいったんです。そしたら、もともと聞く気がなかったと言われて愕然としました。そこから、ちょっと考え方に溝があるのかなと思うようになりました。

では何をともにコーディネートしているのか。職員の方と個別に話をすると、一つはや

はり全要研。厚生労働省の後押し、認定という言葉が派遣元としてはあります。

もう一つは、近隣県に準ずるという考え方があるように感じています。今年度、現任研修があったのですが、一人入力のパソコン要約筆記をされている県から講師が派遣され、私たちがこれまでどおりの連係入力したところ、「これでは駄目です、私たちは連係入力から一人入力に変えました」とすごく否定されました。そのとき、「私たちの県は派遣元はこういう方向に持って行こうとしているのか」と、とても心配になりました。

5つめです。では、何をコーディネートの方にするのか。

認定試験に合格した人は、要約筆記者として活動できる人として認定されたのだから、一人前の要約筆記者なんだから、もっと現場にでも大丈夫でしょう、という考え方。つまり、厚労省が後押しする全要研、認定試験協会が基準。確かに各地方自治体はお役所的なところなので、何かに基準が必要なんだと思います。そういう体制をすごく感じています。

我が県では派遣を検討する会議において、県の人、利用者団体、要約筆記者団体が集って話をするのですが、実際に要約筆記者団体というのは全要研に入っている人ということで、全要研の支部リーダーが出席されます。

私たちはパソコン要約筆記者で、全要研の考え方とは違いを感じているので入っていません。なので、その会議には呼ばれない。私たちの意見はそのような公の場に何も反映されない、そういう状況です。

大場 ありがとうございます。切実な声を聞きました。

「利用者ファーストでいきたい」

あたりまえですね。それができないのは、テキストとか講習会とか、試験。試験は統一試験の協会が実施していますが、それをやらないなら自分のところで試験をして採点をしないといけない。でも連係入力の力は、どう採点すればいいか。ちょっとまだノウハウがはっきりしていないなど問題がありますね。

(参考)利用者からの意見

※各種アンケートや文字通研に直接寄せられた声より一部を抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

利用者からの意見

- ・ 利用者には全文を聞く権利があるので全文が必要ないというのは横柄でしょう。要約筆記者の意識を変える必要がある。
- ・ 東京都の派遣を、使うと要約してしまうので、わかりにくい、省略も多い、困る。
- ・ 話し手のニュアンスとできるだけこまめに表出を心がけてほしい。
- ・ 要約する必要があるが 感情などは伝わりにくいと思う。
- ・ 要約してもらうことで安心感がある。

事例

- ・ 待っていても結局要約が出てこない時や担当者が変わった時に出ない要約があったりする事が不満
- ・ 指示代名詞がある場合、何を指しているのかわからないことがある。
- ・ PC の表示が遅くてイライラしてしまい、同時手話通訳を見ってしまう時もあります。この手話通訳も省略が多く理解しにくい。(中略) 一日も早く PC 通訳の改善を強く望みます。
- ・ 多数決や賛成反対、質問したいとかなどのタイミングが合わず、遅れてしまう時がある
- ・ 拍手のタイミングが他者と異なり遅くなる。
- ・ 質疑応答時などで質問したかったが、時期を逸してしまった。
- ・ 要約しすぎて、知りたいことがわからない。全文表記を求めるのは難しいかも知りません。ろう者の方と同じ会議に参加して時に、「要約筆記は、これだけ？」と言われました。短すぎてびっくりしてた。

(参考)入力者からの意見

※入力者へのアンケートより一部抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

要約についての意見

- 要約は悪ではない・要約筆記者養成講座で学ぶ内容は間違いではない。要約技術が不十分な場合、聞こえた箇所だけを入力する、といった稚拙な文になり通訳として通用しないことがある。問題は、「要約(全要研の考え)が正義」であるという価値観にある。
- 自地域では全要研の指導内容が全てです。スクリーン上を流れる文字を見続けるのは大変。だから「要約する」。(中略) その結果、最終的に出された文章は議事録になります。これは情報保障ではありません。
- そもそもパソコン要約筆記が手書き要約筆記から派生し、全要研において手書き要約筆記の枠内で捉えられているのが根本の問題のように感じています。養成テキストや認定試験も手書き主流の考え方で、それに則った「認定試験に合格した人は要約筆記者として活動できる人」と考える自治体の派遣元と、利用者ファーストに考えるパソコン要約筆記者との間に考え方の大きな溝があると思います。

事例

- 1人を対象にしたノートテイクで(要約の)要望に応え、報告したら派遣元から激しく叱責された。全要研では「全国均質」を大事にしている)。以後、報告せずに独断で同様の対応をしている。
- 私の周りには全文入力を求め、短く要約されすぎることに不満を持っている利用者の方が何人かいらっしゃいます。その中には要約筆記者養成講習会の運営に携わっている方もおり、理想と現実のギャップに悩まされています。

「要約筆記」という名称についての意見

- 「要約」という言葉が、支援方法を限定して使われることが問題と思っている。入力の際に要約するかどうかは、入力者・話し手の様子などなど、その都度変えないと、真の支援にならないと考える。福祉施策で「手話通訳」と同等に「要約筆記等」と使われているので今から大きな変更は難しい？一方で「等」とあるので「極度な要約をする支援方法」と限定する意義はないと思われる。全文に近い入力でも当然「要約筆記等」。
- 名称を「パソコン文字通訳」に変えない限り、全文に近い通訳を求めることにはならないと思います。名称を変更したとしても、場面によって要約することもあると思います。
- 「全文に近い文字通訳」や「音声認識を使用した文字通訳」なども「要約筆記」と、ひと括りにするのは問題があると思います。
- 1人入力だから当然、情報の欠落が生じます。その欠落を指摘すると「私たちは要約筆記者だから要約しているんです」と反論されます。ただ入力が追いつかないだけなのに。筆記者の前につく「要約」の言葉が、情報欠落の免罪符になっています。
- 要約筆記よりも文字通訳のほうが、一般の人には違和感なく理解できる気がする。
- 手書きから始まった要約筆記が、時代の流れやニーズに応じて「パソコン」という手段になった。文字情報に変換する手段は違えど、根底にある考え方は変わらない。そして、全部を文字にできないのだから「要約」する。だから「要約筆記」という名称には何ら問題はない。
- 「要約」の単語の意味に過剰に引っ張られ、要約ありきの入力になると、利用者の「全部知りたい」要望から乖離するので、その場の筆記者の技術的に最大限の入力量・正確性・同時性の中での書き言葉としての読みやすさにつなげるための要約だという筆記者の意識付けが重要なのではと思います。全くサマになりませんが「書き言葉起こし」のようなイメージだと近いかも？

論点2. 養成について

大場 論点2は養成についてです。

要約筆記者を集めて指導して、試験を受けてもらって登録するということに、聞こえない当事者が入るということは必須だと考えています。実際、多くのところに聴覚障害当事者が入っている。けれども、うまくいっている神奈川のようなところと、そうでないところがあるんですね。

ここで、養成カリキュラムを厚生労働省が出していますので表示します。

基本的に 84 時間の研修をすることになっています。これが基準ですが、参考に留めて、都道府県の裁量で独自でやっても構いませんということになっている。なので、神奈川県は独自のカリキュラムで養成をして、うまくいっている。

厚生労働省は養成の目標として、こう言っています。「難聴者等の多様なニーズに対応できる要約筆記を行うに必要な知識、及び、技術を習得する」。

「多様なニーズに対応」と、ちゃんと書いてあるのです。

要約筆記者養成カリキュラム			
養成目標	聴覚障害、聴覚障害者、とりわけ中途失聴・難聴者の生活及び関連する福祉制度や権利擁護、対人援助等についての理解と認識を深めるとともに、 <u>難聴者等の多様なニーズに対応できる要約筆記を行うに必要な知識及び技術を習得する。</u>		

それから、座学もたくさん学ばなければいけませんが、実際にパソコンを開いて練習をする時間は、84 時間の中で、厚生労働省のカリキュラムのとおりにしていたら、とても少ないのが現状です。

パソコンの連係入力については「選択必修科目」となっています。連係入力の時間は、たった2時間、あるいは6時間。これが現状ですね。

●選択必修科目（おおむね10時間以上を選択）			
【講義関係】			
時間数	教科名	目的	内容
1	1 社会福祉の基礎知識Ⅱ	当該自治体の障害者福祉制度を理解する	当該自治体の障害者福祉制度
2	1 対人援助Ⅱ	対人援助についてより深く理解する	観察技術
3	2 要約筆記者のあり方Ⅱ	要約筆記者のあり方をより深く理解する	社会福祉従事者としての専門性
4	4 聴覚障害運動と手話	聴覚障害者運動や手話通訳活動の歴史を理解する	ろう運動史・ろう教育史 手話通訳の理論と実践 聴覚障害者の社会参加の実情
5	2 二人書きおよび連係入力Ⅰ ※	要約筆記の方法である二人書き、連係入力の特性を理解する	二人書きおよび連係入力の特徴 二人書きおよび連係入力の利点と注意点
10	計		
【実技関係】			
時間数	教科名	目的	内容
1	6 二人書きおよび連係入力Ⅱ ※	二人書きや連係入力の基本技術を身につける	二人書き（手書き） 連係による入力（パソコン）
2	6 演習（模擬要約筆記）※	講義、実技講習の各内容を、模擬的に実践することで、要約筆記の能力を高める	講演会、会議等での全体投影 ノートテイク
3	6 現場実習 ※	講義、実技講習の各内容を集団で実践することで、要約筆記の能力を高める	集団（講演会、会議等）での全体投影
18	計		

（注）科目名欄に※印のある科目は、手書きとパソコンでクラスを分けて行う。

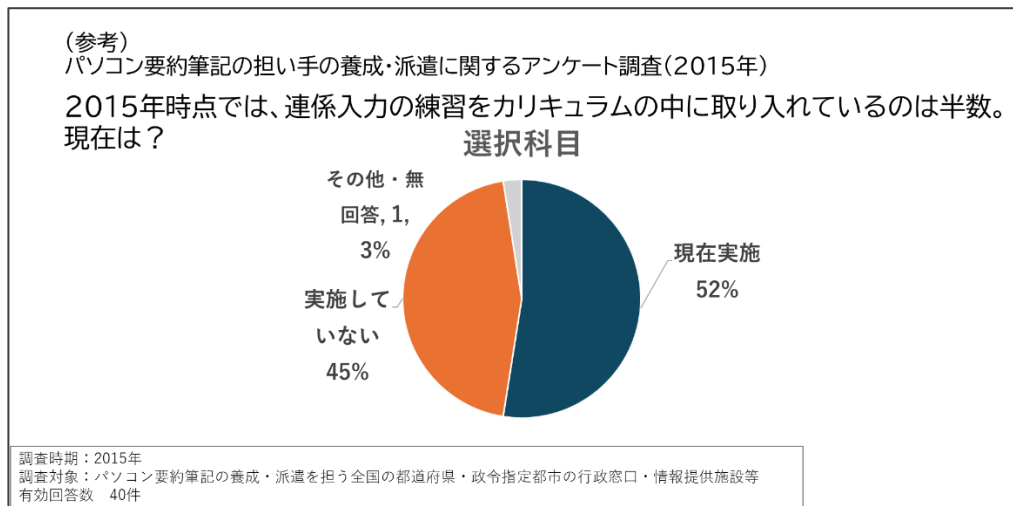
（出典：厚生労働省「要約筆記者養成カリキュラム」<https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/sanka/dl/shien03.pdf>

さて、参考までにグラフを紹介します。

実は文字通研では 2015 年に、養成カリキュラム、そして試験がネックなのではないかと考えて、全国の都道府県、政令市の行政窓口や情報提供施設を対象にアンケートを行いました。

連係入力を選択科目となっていますが、「実施していますか？」と聞いたところ、「実施している」と回答したのは約半数でした。

現在では、どうなのでしょう。また聞いてみたいところです。



養成に関しては、利用者の声はざっくりとした意見しか出てきていませんが、こういった意見がありました。スキルが十分であれば、かなり解消できる話なんですけど…。

- ・ 「利用者の希望どおりに情報保障できるようスキルを磨いてほしい」。
- ・ 「ある程度の誤変換は気にしないでいいのでリアルタイム性を重視してほしい」。
- ・ 「ろう者のいる会議で、いつも待ってもらっている。手書きのように細かく表示してほしい」。

一方、入力者からはすごくたくさんお答えをいただきました。ごく一部のピックアップでございます。問題がいっぱいあるということです。

- ・ 「連係入力のスキルをもっと磨きたいが、地元の入力者の考えにバラツキがあり、十分にレベルアップできていないと感じる」。
- ・ 「連係入力のスキル向上には複数名での練習が必要。しかし自県では難しい。連係入力をやったことのない要約筆者ばかりだから」。
- ・ 「連係入力をするためには、まずは個人の入力スキルが確立していないと無理だと思う」。
- ・ 「情報の取捨選択、または整文の技術が不足している人はかなりいる」。

回答してくださった方はベテランの方が多いので、スキルアップをさせたい。もちろん自分もしたいけれども、うまくいかないという声ですね。

【会場からのご意見】

大場 さて、養成に関することで、また皆さまからご意見をいただきたいと思います。まずは森さんから、神奈川県ではなぜうまくいっているのか、講習会を開いたり独自のテキストや試験を実施したりすることがなぜ可能なのか、お話しいただけるとありがたいです。

～ 神奈川では養成、試験、派遣を三者で話し合う ～

森 詳しいことは先ほどの神奈川の工藤さんがあとから話をしてくれると思いますが、とにかく、利用者の立場でどういう文字通訳が必要で、そのための講習会はどうあるべきかを考えているんですね。そのためには、一番の主体である県のセンターが、年に4～5回委員会を開いて、養成講習会のあり方についていろいろな意見を交換しています。それに基づいて、要約筆記協会の皆さんが研修会や学習会を行っています。

例えば今、手話勉強会で二人書きの要約筆記を取り入れて勉強しています。意外と手話勉強会の要約筆記は、普通の要約筆記とはちょっと違うんです。書かないでほしいときには書かない。手話表現をしているときに、ここは書かないでほしいというタイミングがあるんです。そういうことが現場であると、委員会ではそれをどうしようかという問題が出ます。そうなりますと今度は手話勉強会に合った要約筆記のための学習会、あるいは研修会を開いているんですね。

何かのきっかけで現場で起きた問題は、必ず三者で委員会で話し合っ、最終的には三者でこういう案がいいのではないかと決める。そういう問題意識をお互いに持っています。三者が勉強しているんですね。どうあるべきかを常に考えている。

現場で起きたことは、要約筆記の方が必ず報告として書いているのだらうと思います。そういう仕組みがきちんとできている。それは信頼関係があるということですね。だから何でも言える。

試験についても、必ず委員会を開いています。

試験問題を作成するときは、こういう問題の出し方でいいのか、こういう問題案でいいかどうか、三者で話し合いをする問題作成委員会を開いています。あまりこういうことは言っはいけないんですが。

実技試験では一人入力と連係入力を実施しています。連係入力はチームワークですね。さっき神奈川の工藤さんがおっしゃっていましたが、連係入力では1人の入力レベルが落

ちていても、お互いに助け合える仕組みがあります。それでチームワークとして出来上がっていただければいい。審査の仕方としては、チーム全体として評価します。ですから主入力が悪くても補助がきちんとフォローするかどうか。その辺もきちんと評価しています。そういう仕組みです。

講習会も、個人の入力のスキルを上げて、今度は連係入力に切り替えて、連係入力も結構な時間数で行っています。

試験に合格したら、一度研修会を開いて合格者みんなを参加させて、現場に派遣する。そういう流れになっていますね。だから1年目に、みんな現場に出るようにしています。そういう場をセンターが作ってくれています。センターと要約筆記協会でそういう流れを作っているんだろうと思います。うまく繰り返しやっています。

先ほど、審査が大変とか問題を作るのが大変とか言っていましたが、でも、統一試験をする前は、皆さんやっていたんですよ。私は分かりませんが。

1人でできなかつたら、確かに負担は重いかもしれませんが、1人でできなかつたら、メンバーはそれなりにいるわけですから。そのための要約筆記協会だと思うんですよ。協会全体で考えればいい話ですよ。

大場 風通しの良さと、人材の豊富さですね。ありがとうございました。

～ 養成と試験のゴールは一人入力。その後の利用者の希望に沿えない ～

岸本(パソコン要約筆者) 岡山県と岡山市、倉敷市に登録しております、要約筆記者の岸本です。神奈川のうらやましい話を聞いたあとですが、岡山県は問題が多々あります。

神奈川は独自の試験をしています。他にも独自の試験をしているところはあるかとも思います。ただ、統一試験になった背景を考えると、地域の格差をなくすために要約筆記者を統一、ある程度のレベルにする。そのための試験を一斉に実施して、全国各地どこでもある程度の要約筆記の情報保障が受けられるようにする。そのためにできた制度だったと思います。ですから、それをまた地域の独自試験に戻すというのは、逆戻りのような気がします。

この統一試験の目指すところ、最終目的は、手書き、パソコンも一人入力ができるというレベルです。ですから連係入力のところがオプションになっていますよね。

私はたいてい養成講座で、連係入力の2時間だけを担当しています。そのときには「ここは統一試験問題には課されません」と言います。ですが、「試験が終わったあと、実際の現場は連係入力で行っています」と言います。「ですからここで言ったことをぜひ、頭に残しておいてください」と言います。連係入力はなぜあるかということを、テキスト2ページぐらいしかないのですが、読み込んでもらいます。「そこは多様なニーズに応えるためです」と。一人入力ではできなかった、例えば、ちょっと間に面白い話を挟んだり、「例えば」と言って出した例文では、一人入力では落としますが、連係では伝えられます。

もちろんニュアンスも関係ならできるんですよと強調しています。

そして統一試験が終わったあと、現場に出るために関係入力の実習をします。そのとき、私は文字通研のテキストを使っていました。

ところが問題が起きました。関係入力で現場に出ていたら、統一試験で受かった方でもなかなか関係できないんですね。

実は、一人入力のできるレベルというのは、入力速度はそんなに速くなくても自分の入力速度に合わせて要約してしまえば合格できちゃうんですね。関係入力には、パートナーの入力を見るなど、別の力がものすごく必要です。文字通研のテキストはそこがすごく書いてあって、それで教えていたんですけれども、なかなかできない。統一試験に合格しても関係ができない方が出てきました。各自のレベルを見てチームを組めば、何とか関係で、チーム全体としてそれなりの情報保障をすることができるんです。それを強く言ったのですが、コーディネーターがだんだんそれを認めなくなりました。統一試験で受かった方を優先にチームを組んでいくようなことが起きています。

そうするとどういう要約筆記になるかということ、関係入力であるにもかかわらず、一人入力のような情報保障が出てくるんです。

岡山では今、チームが真っ二つに分かれています。関係入力のできるだけたくさん全文に近い形で出すチームと、「これで関係をしてるの？」というような、まるで一人入力しているようなものを関係で出すチームとです。それをコーディネーターが振り分けています。

さあ、利用者は困っています。今、一生懸命、利用者の意見を上にあげているんですが、なかなか聞いてもらえません。利用者の団体も頑張っています。要約筆記団体と意見交換会をしようと頑張っています。やっています。

結局、養成講座と統一試験は、目指すところが一人入力だから、それはそれでいいんだと思います。「最低でも一人入力でここまではできる」という要約筆記者が地域で登録されていく。ある程度のレベルはそこで確保されるから、試験と養成に関しては、このままでもいいと思います。

ただ利用者のニーズに合わせた情報保障をするためには、その後が必要なんじゃないかなと思います。その後、どうやって関係入力の練習をし、コーディネーターがニーズに合わせたものを出せるチームを組むか。そうすれば絶対問題はないんですよ。

利用者が要約筆記者の派遣依頼をするときに、パソコンか手書きはたぶん選べると思います。「パソコンで」と書いたとき、「これは難聴者の重要な会議だから、極力皆さんの発言をそのまま出せるような要約筆記者のチームを作ってほしい」とか、そういう細かな要望を出す。コーディネーターに伝わるような要望を出してもらったら、もうちょっと聞いてくれるんじゃないかなと思います。

今、利用者の方と、どうやったら希望のメンバーが来るんだろうかということを、一生懸命、悩んでいるところです。他の地域の皆さんはいかがでしょうか。岡山の実情を恥ずかしながらさらけ出しました。ありがとうございました。

大場 ありがとうございます。生々しいお話でした。低いほうに合わせようという流れになったのは、そういうことだったのかと思いました。

(参考)利用者からの意見

※各種アンケートや文字通研に直接寄せられた声より一部を抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

意見

- 利用者の希望通りに情報保障できるようスキルを磨いてほしい。
- ある程度の誤変換は気にしないでいいのでリアルタイム性を重視してほしい。
- ろう者もいる会議で、いつも待つて貰っている。手書きのように細かく表示してほしい。

事例

- 要約している人の力量の差が顕著。打っている途中で追いつけなくなり、この要約やめた、と消すケースがあった。

(参考)入力者からの意見

※入力者へのアンケートより一部抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

【スキル向上について】

- 連係入力スキルをもっと磨きたいが、地元の入力者の考えにバラツキがあり、十分にレベルアップできていないと感じる。
- 連係入力スキル向上には複数名での練習が必要です。しかし自県の要約筆者でやるのは難しい。連係入力をやったことのない要約筆者ばかりだからです。
- 連係入力をするためにはまずは個人の入力スキルが確立していないと無理だと思う。しっかりと入力スキルを上げてほしい。また県内には何年経っても上達しない登録者がいるが、改善が難しい場合もあるのでどうしたら良いのだろうと悩むこともある。
- 利用者意識調査に寄せられた意見にあった「何を言っているのか理解できない」について。入力が追い付かないときに求められる、情報の取捨選択、または整文の技術が不足している人はかなりいる。
- ポイント制のため、それだけに学習会や研修会に参加する人が多い。また、地域だけの活動にしている人もいる。最低限の研鑽でおわる人が多いのが残念。
- 「速い」だけが良いのではなく、読みやすさもとても大事なことで感じています。連係入力にするにあたり、コンパクトな一定の量で表出すること、句読点の打ち方なども気をつけたいと考えていますが…瞬時の判断となり、なかなか難しいです。

【統一試験について】

- 統一試験合格者でもスキルは千差万別。

【その他】

- 支援者が増えない、減っていることが何より課題。魅力ある新しい活動であることを名称が提示できたら、どんなに良いかと妄想している。

事例

- （全要研の手法・考え方について）利用者の要望に応えるため、あるいは講座受講生の効果のため、ある程度の融通は必要と考えるが、それが許されない。養成講座講師をしていて痛感した。

論点3. ログについて

大場 ログが欲しいという要望は長く実現できていませんが、2024 年の利用者意識調査ではほとんど意見がありませんでした。利用者の皆さんはもう諦めているのでしょうか。ずっと運動しているのに、もらえない。

入力者の皆さんはどう思っているか。

- 「ルールを作る。それに則ってお互いに同意のもとログは提供すべき」。
- 「『記録』ではないことを、しっかり認識していただく必要がある」。
- 「派遣元が禁じているため、現在の派遣元に身を置いている限りは、応じることはない」。

【会場からのご意見】

そんなログの問題ですが、何かご意見がありましたらお願いいたします。

～ 使いやすい要約筆記でないと、協会も衰退するのは ～

森 神奈川の森です。「ログは記録ではない」ということは、神奈川も基本的にはそういうことです。

ただし会議など大事なときは、派遣元（聴障センター）に了解を得まして、議事録を作るための参考としてログをいただきたいと言っています。ログは事務局が議事録を作るときに使うだけで、終わったら処分するということで了解した上でログはいただいています。

それから、病院に行ったときなどが該当するかと思いますが、市町村によってまちまちですが、例えば、利用者が紙とペンを持ってくるかと。書き終わって情報保障が終わったら紙とペンを利用者に返してください。だから書いたものは戻ってくるわけです。一方で、紙とペンは派遣元で準備しますとなると、なかなかもらえない。それは地域ごとにあるんですね。地域の格差と考えているんですけども。

利用者が紙とペンを準備するということは、利用者も勉強しなくてはいけません。そうすればもらえるんだと。そこは、派遣元と調整をしなければならないですね。

行政にも話をしていますが、合理的配慮という法律を盾にして、我々はお医者さんの話を聞いているときにメモしにくいから、終わったとき紙を欲しいと。紙とペンを利用者が準備して、返してもらえる方法が一番スマートかなと思います。合理的配慮という、障害者差別禁止法を盾にして行政に言えると思います。

もう一つ大事なことは、利用者が使いやすい要約筆記でないといけない。協会に入って病院で要約筆記が使えますよと言ってもらったのに、病院で書いてもらったものをくれなかった。なんだ、使いにくいじゃないかとなった場合、利用者は協会に入った意味がない

といって、協会をやめるかもしれない。

幸い、神奈川県は会員数が増えています。会員が減って協会がなくなってしまうような事態になっているのは、要約筆記が使いにくいことも一つの原因ではないかと思います。全要研・全難聴は、そこを考えなければいけないと思います。協会の数が今、50 を切っていますね。役員のなり手がいない。若い人が入らない。高齢者は辞める。だから協会に入る意味がない。要約筆記もきちんとしてくれない。そういう協会じゃ困るんですよね。居心地のいい協会であるべき、居心地のいい催事とか。そういうことを神奈川の協会は考えています。全要研、全難聴も考えてほしいと思います。

(参考)利用者からの意見

※各種アンケートや文字通研に直接寄せられた声より一部を抜粋。原文ママ。

- 個人の場合ログがもらえないのが難点。特に病院等はログは重要となる。

(参考)入力者からの意見

※入力者へのアンケートより一部抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

【賛成意見】

- ・ 聴覚障害者はメモが取れない場合が多いので、条件付で渡して良いと思う。
- ・ ルールを作る。それに則って、互いに同意のもとログは提供すべき。(同様の意見多数)
- ・ 条件付きで渡してもよいと思う。聞こえる人や主催者等を含め、すべての人にログは「記録」ではないことを、しっかりと認識いただく必要があると思う。
- ・ ログが記録でないことをきちんと互いに理解するのが大前提かと。また、企業や健聴者の議事録作成用ではないことはもちろん違うと考えます。
- ・ 報告書作成のための資料になるなど主催者にとって「利」となるものがあると、費用負担なども納得しやすくなるし、作業者も責任感を持って作業に当たることができると思います。

【反対意見】

- ・ 通訳である以上、ログの提供には抵抗がある。その場で確認をしたいなどの希望があれば、応じてよいとは考える。但し、派遣元が禁じているため、現在の派遣元に身を置いている限りは、応じることはない。

事例

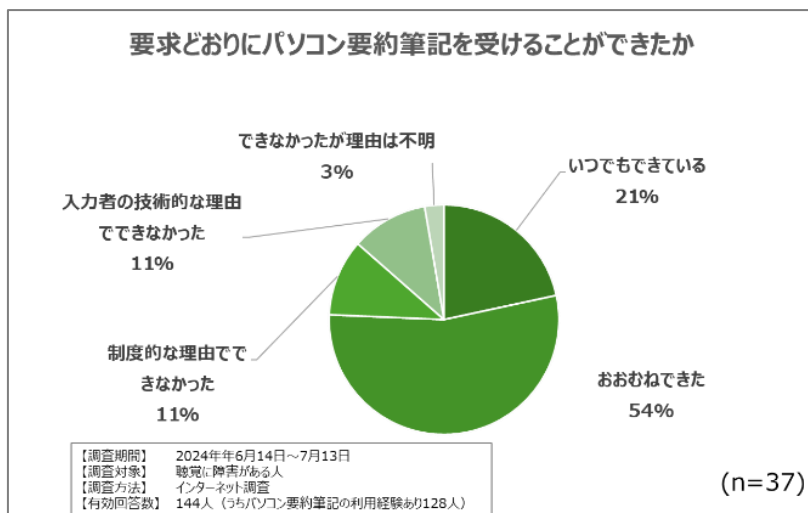
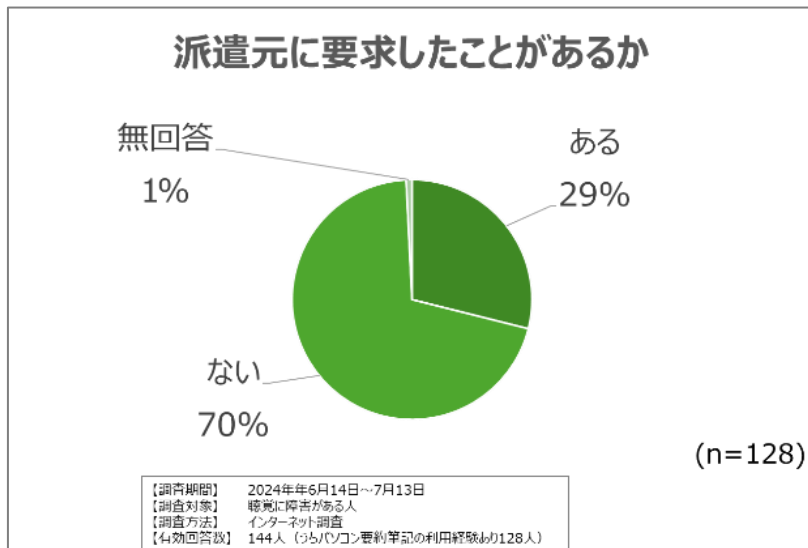
- ・ 利用者が健聴者もいる委員会の議事録担当になった(順番出回ってくるもの)。健聴者は録音して聞き直しているが、利用者はそれができない。派遣元に、委員会の健聴者と利用者としてログの提供を依頼したが、提供できていないので、委員会側で利用者がメモを取れるように会話の速度などを配慮するように、との回答だった。利用者のノートテイク画面の文字のサイズは10ポイントで、表示できるだけの行を表示するようにすることになったが、メモを取っている最中に意見を求められたら、参加の保障がないのではと心配している。

論点4. 利用者との対話について

大場 合理的配慮を提供しないことは、差別に当たります。障害者差別解消法にそう明記されています。ところが、対話を受け付けてくれない現状があるようです。

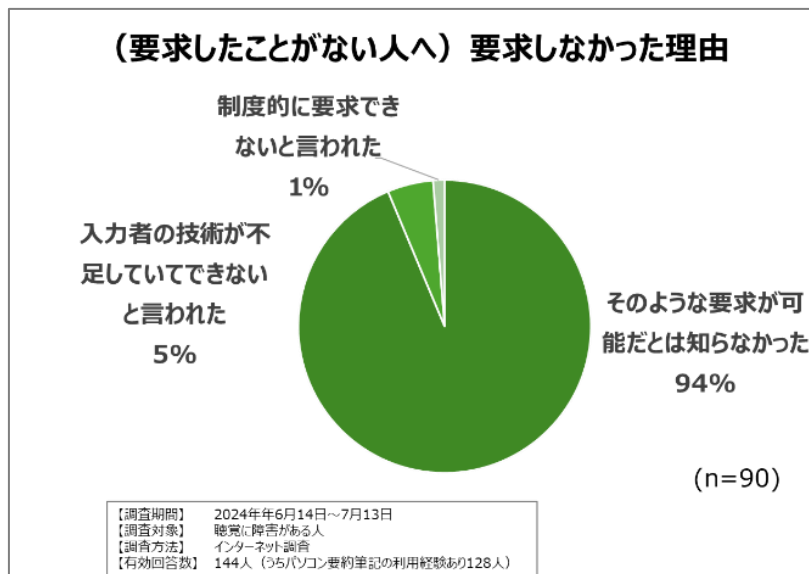
このグラフは、「派遣元に要求したことがありますか」です。「ない」が7割。

でも、要求どおりにパソコン要約筆記を受けることができている人も多いのです。



では、要求したことがない人は、なぜしなかったのでしょうか。お聞きしましたところ、「そのような要求が可能だとは知らなかった」という回答が9割でした。いえ、可能なんですよ。当然の権利なのです。

「制度的に要求できないと言われた」という意見もありました。それは回答した人の知識が不足していると思います。



利用者の声です。

- 「一部団体・組織が要約筆記のありようを牛耳っているのは全く理解できません。
Nothing about us without us !
当事者はもっと声をあげていいと思っています」。
- 「方法を決めるのは、入力者の皆さんではなくて、利用者である私たちのはず。
どういう方法で表示してほしいか要望するのは私達であって、入力者の皆さんが
決めて勝手に表示するものではないはずだ」。

「Nothing about us, without us」というのは、「私たち抜きに私たちのことを決めないで」という意味ですね。

何かを決める場所に当事者が必ずいて、ちゃんと意見を言う。それがうまくいっているのが、神奈川の例だと証明されています。

一方、入力者に意見を聞くと、実は対話したいと思っている。けれども、それが許されない状況のようです。

- 「利用者ときっちり向き合ってご意見を伺いたい」。
- 「私の居住地では入力者の意見は取り上げられにくい」。

当事者が入力者に訴えかけてくるんですが、うまくいっていないということがあるということです。

予稿集にご意見がたくさん出ていますので、お読みいただければと思います。

(参考)利用者からの意見

※各種アンケートや文字通研に直接寄せられた声より一部を抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

入力方針への意見

- 一部団体・組織が要約筆記のありようを牛耳っているのは全く理解できません。Nothing about us without us！当事者はもっと声を挙げていいと思っています。
- 全文に近いものがこんなに求められているのに実現しないのかというと、要約筆記者の試験として統一試験を採用しているところが非常に多い。
- 何が大事かということ、私たちが何を求めているか、ということだと思います。私たちが求めていることを、どうして実現できないのか、ということが問題なのです。
- 以前から強く思っているのは、その方法を決めるのは、入力者の皆さんではなくて、利用者である私たちのはず。どういう方法で表示してほしいか要望するのは私達であって、入力者の皆さんが決めて勝手に表示するものではないはずだ。

事例

- 一人で参加したワークショップは傾聴の方法を学ぶというものだった。相手から会話を引き出す方法として、優しい言葉遣い、単語、語尾を知りたいと思っていたのに常体の文章が出てくる。(中略)要約筆記者に、「口調がわかるようにできる限り要約はしないでほしい」とお願いしたら、1人の要約筆記者に「できるかぎり早く出すために常体や体言止めにしている」「全文入力の入力経験がないのでできません」「県の事業では1人入力です」と言われた。
(中略) 連係入力を地域では練習しないのか。二ーズもあるはずなのになぜか。全文で情報がほしいが、全文入力ができないのであれば、音声認識の修正をしてほしい。

設営などへの意見

- かさばる、目立つ
- 人からどう見られているのか不安になったり恥ずかしくなったりする。
- 要約筆記者も手話通訳者のように時には存在がわかるように目立つような位置に座ってほしい。文字の投影だけでは気づきにくく PR（周知）が進まないと思っています。
- 講演会などで講師と字幕スクリーンが離れているので視線移動すると講師の表情や動作が見えない。
- タイピングの音がうるさいと他の参加者から苦情が出た。
- 2人の要約者のパソコンの隣に座るスタイルなので仰々しくなってしまうのが嫌だなと思うことがある。聴覚障害者が4名いた時に1セット（2名の要約者）は2名までと言われ、4人分の2セットを用意してもらったのが理解できなかった。
- 文字の大きさは会場によって変わる。大きすぎると情報量が少なくなるので、会場に合わせて欲しい
- 機材の準備など利用者の負担が大きい。会場の電源不足。オンラインの情報保障ができるパソコン要約筆記者が少ない（そもそも、活動できるパソコン要約筆記者が少ない）。

(参考)入力者からの意見

※入力者へのアンケートより一部抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

意見

- どうしても「要約」には、要約筆記者の個性が加わります。利用者はどう受け止めているか、どこまで単なる「情報」にまでニュートラルにできるか・すべきか。利用者ときっちり向き合ってご意見を伺いたいです。
- 自分の居住地は、改善点なども、入力者の意見は取り上げられにくい。当事者、利用者から意見していただきたいが、当事者らからは「(派遣元に) 伝わりにくいから、入力者から言っておいて」と言われる。同行を提案しても、恥ずかしいと言われる。ノートテイクなどで入力者を引き連れるのは、私が利用者なら抵抗があるので、公的派遣も遠隔になればいいと思う。
- ある特定の人たちは全要研の手法・考えこそが正義と考えている。そしてそれを追求することが目的となっている。彼らが考える正解にどれだけ近づけるかが大事であり、そこに利用者は存在しない。
- 人によっては要約を望む、読みきれないから「正確な要約」をした文が良いという場合もあるだろう。それぞれのシチュエーションに応じた通訳を利用者が選べる状態に全国的になるのが望ましいのではないだろうか。
- イベント主催者との打ち合わせにおいても、なぜ必要なのか（手話があれば、、、など含め）を説明できるようにしておくとう利用者のニーズとの齟齬を埋めることができます。

事例

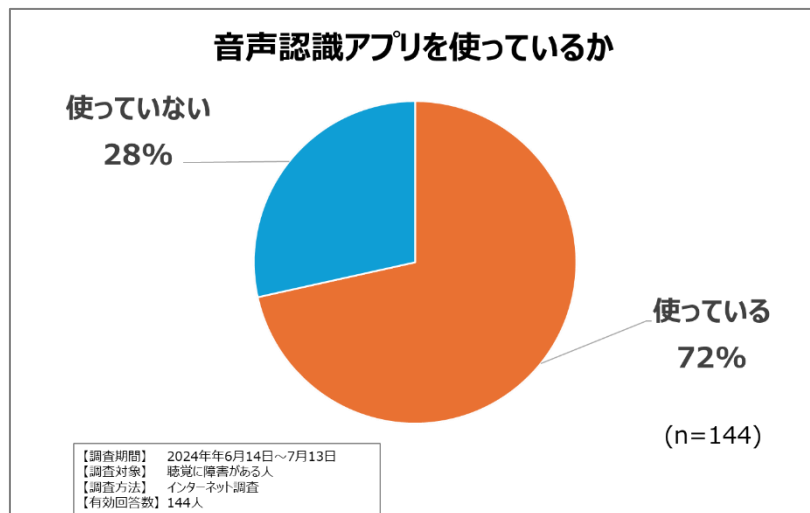
- 利用者、当事者に、出来について直接聞くようにしている。また、不利益があった場合、利用者や当事者から派遣元に意見しないと改善されないと伝えている（入力者の腕、機材設営、ログの提供など）。
 - 支援関係者による協議の場を、常に求めて実現させていく。支援システム上で、コメントのやり取りを、可能な限り、行う。
 - パソコンの起動前でも話ができるよう、小さいホワイトボードを持ち歩いている。
 - 個人対応(ノートテイク)の場合：
 - ・手話通訳にお願いする・開始前・休憩時にディスプレイでチャットし、対応している
 - ・事前に要望は聞くが、それで問題がないか、他に要望はないか、最初の休憩時に確認している
- 全体投影(=特定多数)の場合：
- ・昨今はパソコン通訳者に話しかけてくることはない・通訳者側から積極的に話しかけることはしない
 - ・スクリーンに照明が当たって文字が読みにくい等は、開始前に解決するよう、現場担当者と話合っている。彼らはそれには真摯に対応してくれている。
 - ・通訳者で判断できない、対応できない要望は、現場担当者につなぎ、改善策を探っている。

論点5. 音声認識について

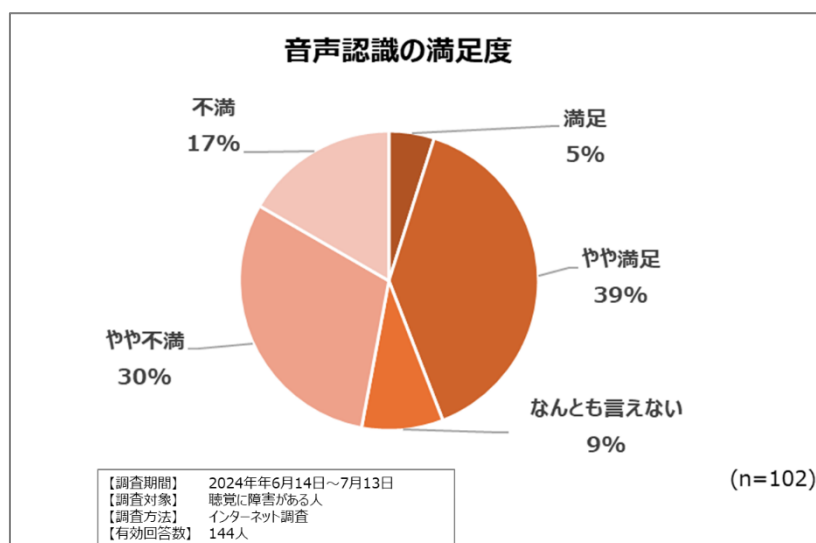
大場 ここからは音声認識についてです。

冒頭に紹介したメールのように、「要約筆記者にお願いするのはやめて、自分たちで音声認識するからいいよ」というところがあります。「要約筆記が全体的に衰退している」という声も出ています。

「音声認識アプリを使っている」人は 2024 年夏の時点で 72%。複数使い分けている人もいました。



とはいえ、情報保障として音声認識を使った場合、「どの程度満足していますか？」という問いに対しては、満足している人は半分以下なんですね。



利用者の声です。

- 「音声認識アプリを使って素早く誤表示が少なく表示するスキルを持った文字通訳者（要約筆記者）が増えることを強く願っています」。
- 「普段、音声認識の速度に慣れているため、同時に表示されないことがもどかしい」。
- 「音声認識を PC 要約者が訂正するのがベストではないかと思う」。

入力者の方も精度が一昔前よりよくなったと感じていました。でも文字通訳とは別物で、音声認識ですべて解決するとは誰も思っていないでした。

- 「積極的に利用し、活用されるべき最先端の技術であるが、文字通訳とは別物」。
- 「利用者へのフレキシブルな対応」という点ではまたパソコン文字通訳が必要とされる場面は残っていく」。
- 「全文、少し要約、大幅要約等、選べる形になっていくと思います」。
- 「それぞれのシチュエーションに応じた通訳を利用者が選べる状態に全国的になるのが望ましい」。

パソコン文字通訳が必要される場面は残る。だから、選べる形に今後になっていくのではないか、という意見がありました。

(参考)利用者からの意見

※各種アンケートや文字通研に直接寄せられた声より一部を抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

意見・事例

- (自分の) 県では音声認識アプリを活用できる要約筆記者はいません。(中略) 手書きでは遅すぎて使い物にならないので、親しい健聴者に音声認識アプリで通訳を頼んでいますが、誤表示が多いです。手書きよりはマシですが、**音声認識アプリを素早く誤表示が少ないスキルを持った文字通訳者(要約筆記者)が増えることを強く願っています。**
- パネルディスカッションなどの登壇の際に(自分以外のパネラーは聴者)パソコン要約がワンテンポ遅れるため、発言のタイミングがつかめなかった。**普段、音声認識の速度に慣れているため、同時に表示されないことがもどかしい。音声認識を PC 要約者が訂正するのがベストではないか**と思う。速度も精度も費用面でも。

(参考)入力者からの意見

※入力者へのアンケートより一部抜粋。原文ママ。太字・傍線は文字通研。

意見

- 積極的に利用し、活用されるべき最先端の技術であるが、文字通訳とは別物という認識である。
- 利用者にとって利用価値がある場面では自由に使用すればよい。ただし、通訳提供側が「通訳」とうたって音声認識を使用することには反対。
- 変換精度が急速に上がってきています。将来的には音声認識が利用者の希望に合わせて、全文、少し要約、大幅要約等、選べる形になっていくと思います。
- 場によっては大変有益なものだと思っている。音声認識、パソコン文字通訳がうまく使い分けられると良い。それぞれのシチュエーションに応じた通訳を利用者が選べる状態に全国的になるのが望ましい。
- 最近精度が上がっていると感じています。ただ、「利用者へのフレキシブルな対応」という点ではまだパソコン文字通訳が必要とされる場面は残っていくのではと思っています。
- 音声認識ソフトとパソコン文字入力の関係について、できれば簡単にできるシステムが開発できれば、手書きの方でも取り組みたいと思う方が多いのではと思います。
- まだ発展途上の技術なので、要約筆記者として音声認識技術開発に協力できることがあれば協力したい。
- 人を介する通訳と並べて見られる必要性を感じる時もある（その上で信頼を得られれば…）。
- 音声認識の認識率が最近格段に上がっていると感じる。。

その他の意見交換

～ 文字通研のオンライン入力練習会に期待 ～

寺井 神奈川の寺井です。

今、文字通研で毎月、入力練習会をやっているんですが、今回の皆さんの地域からのご意見と照らし合わせて何かお感じになったことや、今後、どういうことができるのかということのお考えが、何かあれば、宮田理事長やご担当なさっている大場さんたち、事務局さんたちにもお話いただければ、地域の方は元気が出るのかなと思います。

大場 ありがとうございます。

オンライン入力練習会はもう何年かやっています。1年かけて、連係入力を自信を持って現場に出られるようになっていただくことを目標にしています。もう数年やっているもので、次はどうしようって、実は考えているところです。また新しい方がたくさん入ってきそうなら、また一から、なんべんでも話します。

なんでそんな練習会をやっているかという、うまく入力できるのは特別な人と言われるからです。全要研は全国の平準化を重視しているそうですが、特別な人だけができるんじゃないんですね。いやいや特別じゃないよ。みんなやっているよ、できてるよ。やり方が分かっていないだけなんじゃないの？ ならば、やり方、教えます。そういう趣旨で文字通研ではテキストを製作し練習会を行っております。

4月からまた新しくスタートしたいと思いますので、こういうのをやりたいとか、あるいは受けたい人がいるよと紹介していただけるとうれしいです。

できるようになります。特別な人しかできないのよという言葉に惑わされないでください。もちろん練習は必要ですよ。

～ 人材不足で現場は大混乱。でも魅力ある仕事のはず ～

三井(パソコン要約筆者) すみません、一点だけ意見させてください。

神奈川や京都などすばらしいところ、技術のある地域のお話もありましたが、逆に、地域では統一試験を採用しているけれど、実際の現場は連係入力。そういった地域によってばらばらだという問題にあわせて、実は 2023 年度に全要研が要約筆者の派遣に関わる課題のアンケート※を実施しています。

支部に所属する登録者を対象に実施したもので、82 件の有効回答です。

市町村に関して、パソコン要約筆記の派遣事業に出す人は「試験合格者のみ」という地域が 29%。

「試験合格者、移行研修修了者」、つまり奉仕員を含むところが 22%。

「要約筆記奉仕員を含む」、つまり移行研修を受けていない方を含むという地域が 20%。そして最後が恐ろしいことに、「講座修了者を含む」が 29%になっています。市町村のうち結構な数が「講座修了者のみ」で派遣に出している現状です。

私のいる徳島県は「要約筆記奉仕員を含む」という地域です。県の派遣でも「含む」です。

人材不足ということに関して言うと、それでも人が足りないので、独自施策を考えてほしいということで、現在は独自の試験もしくは統一試験の何点以上というのを採用してしまえという流れになっております。連係入力は、下手な人を補うものではないとは言いますが、一人入力もおぼつかないし連係入力もおぼつかない人が出てきて、現場は大混乱の状況になりつつあります。

なんとかならないものかなあと憂いながら、文字通研の理事をしている状況です。皆さんのお知恵を借りたいなと思うのと、この情報保障というのが、とても魅力ある仕事というを広げていけたらと思う次第です。

以上、私の愚痴と状況の説明をさせていただきました。

※出典：全国要約筆記問題研究会「2023 年度 全要研 要約筆記者の派遣に関わる課題のアンケート 概要」
実施方法:全支部会員から市町村に登録する手書き、パソコン各 1 名の登録者を抽出し、無記名で-googleフォームにて回答。回答率 82/100 (82%)

大場 ありがとうございます。そうなんです、魅力ある仕事だと思うんですよね。だから私も何十年もやっている。なんとか広めていきたいですよね。今日は、しがらみとか、ちょっと怖い言葉も出てましたけれども、ブレイクアウトできればなと思っております。

ここに出てきたキーワードだけ言いますと、「利用者ファースト」、「利用者が選べる」ということ。利用者が委員会に参加して、自分たちが望む養成や派遣に関わっている、などでしょうか。他にもいいお話がたくさん出てきましたが、このくらいにして、宮田理事長に最後の挨拶をお願いいたします。

閉会挨拶

宮田 皆さん、お疲れさまでした。

何年か前、合理的配慮という言葉が使われ始めた頃、合理的配慮はどういうものかというポスターがあちこちに貼られていたのをご記憶の方もいらっしゃると思います。

塀があって、その塀より背の高い人は向こう側が見える。でも低い人は向こう側が見えない。では見えるようにしようということで、同じ高さの台を背の低い人たちなどみんなに配る。それが平等であるというような考え方もあるのですが、それは合理的配慮とは言えない。なぜかというと、すごく背が低くて台に乗っても塀に届かず見えない人もいるし、台があれば向こう側が見える人もいる。合理的配慮は、その身長差によって台の高さを調整して、背の低い人には高い台を、背の高い人は低い台を、ある程度の身長の方には相應の台をと、台の高さを調節することで全員が塀の向こうが見えるようにしようということ。それが合理的配慮なんだよという説明が、ポスターにあったことが記憶にあります。皆さんはどうでしょうか。

先ほどから、全国レベルで平準化するためという話がいろいろ出ていますね。せっかく試験に受かったのだから、同じように派遣に出れるようにしよう、ということで、指名を許さずどんな人でも均等な機会に派遣に出るようにとコーディネーターが調節するという話が出ていたようですけれども、それは決して公平とは言わないんですよ。

下手な人に合わせたら、そりゃ楽ですよ、うまい人は。それで困るのは我々です。下手な人が来たら、利用者としては満足な情報保障が得られないので困るわけです。

もしそういう下手な人がいたら、その下手な人にレベルを合わせて派遣をするのではなく、その下手な人がいかに上手になるかみんなが協力をして、下手な人を盛り上げて、練習してもらって、みんなで教えて、そしてみんながレベルアップできるように。そのようにするのが、この仕事に携わる人の務めなのではないでしょうか。

そして、いろんな考え方がある、いろいろなやり方がある。それを私たち、というか私は否定するわけではありません。いろんなやり方があって、長い文章は、やっぱり要約してもらって簡単に伝えてもらったほうが楽だという人もいますし、そのほうがいいと思う人もいるかもしれない。

でも忘れてはいけないのは、それを選ぶのはコーディネーターや派遣元、あるいは入力者ではなく、利用者である我々であるということなんですよ。我々が望むように入力してくれなければ意味がない。

望むように入力できるようにするために、入力者の皆さまは日々努力していただいて、私たちの望むような入力ができるようにしていただきたい。それがプロというものだと私は思うんです。

みんながボランティアとしてやっていたころは、たぶんそういうことを望むことはできなかった。けれど、それぞれの立場などがきちんと守られるようになって、ちゃんと報酬がもらえるように今はなっています。要するに、入力者の皆さんは、みんなプロだと思う

んです。ならば技術を磨いて利用者の望むことに応えられるようにならなければ、プロとは言えないと思います。ちょっと厳しい言い方かもしれませんが。

そして、入力者の皆さんが一生懸命努力しているにもかかわらず、派遣の都合で、あるいはコーディネーターのわがままで、ちゃんと公平に、あるいは利用者が望むような派遣の仕方をしてくれないようなところ。先ほど支部の話が出ていましたが、文字通研は支部をつくることは、もうだいぶ前の理事会で承認されました。ですから文字通研の同じ県の会員が何人かが集まって支部を作ると申し出ていただければ、支部として文字通研として認めて活動を後押しいたします。もしそれぞれの地域で、文字通研の支部として活動することによって解決できるのであれば、ぜひやっていただきたい。我々は、その後押しはします。

その程度のことで解決できないということがあると思うので、それに関しては、会報の挨拶文で触れたように、最終的には強硬手段をとるようなことも考えています。

できれば話し合いによって解決していきたいと思っていますので、先ほど来、矢面に立っている全要研の方々とか全難聴の担当の方だとか、そういった皆さんとも話し合いの場を設けて、何とか全国の利用者の希望に沿うような入力ができるような施策を講じていきたいと考えています。

今年以降も文字通研は頑張っていきますので、皆さん、どうぞ応援をよろしくお願いいたします。

大場 宮田理事長、ありがとうございました。皆さん、長時間、ありがとうございました。お疲れさまでした。

今日は有意義な意見が聞けました。やはりうまくいっている好事例を聞くと、やれるんじゃないかと少し勇気が出た方が、少しでもいたらうれしいです。

でも、問題がいろいろあぶり出されましたね。あまり告げ口しないでくださいね(笑)。でも、非常に問題視している人が多いということは、ぜひ地元で広めていただければと思います。

皆さん、ありがとうございました。

以上

付録

「情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」概要

障害者による情報の取得及び利用並びに意思疎通に係る施策の推進に関する法律 (障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法) 概要 (令和4年法律第50号)	
目的(1条)	全ての障害者が、あらゆる分野の活動に参加するためには、 情報の十分な取得利用・円滑な意思疎通が極めて重要 障害者による情報の取得利用・意思疎通に係る施策を総合的に推進し、共生社会の実現に資する
基本理念(3条)	※「障害者」: 障害者基本法第2条第1号に規定する障害者(2条) 障害者による情報の取得利用・意思疎通に係る施策の推進に当たり旨とすべき事項 ①障害の種類・程度に応じた手段を選択できるようにする ②日常生活・社会生活を営んでいる地域にかかわらず等しく情報取得等ができるようにする ③障害者でない者と同一内容の情報を同一時点において取得できるようにする ④高度情報通信ネットワークの利用・情報通信技術の活用を通じて行う(デジタル社会)
関係者の責務・連携協力・意見の尊重(4条～8条)	・国・地方公共団体の責務等(4条) ※障害者でない者にも資することを認識しつつ施策を行う ・事業者の責務(5条) ・国民の責務(6条) ・国・地方公共団体・事業者等の相互の連携協力(7条) ・障害者等の意見の尊重(8条)
基本的施策(11条～16条)	(1) 障害者による情報取得等に資する機器等(11条) ①機器・サービスの開発提供への助成、規格の標準化、障害者・介助者への情報提供・入手支援 ②利用方法習得のための取組(居宅支援・講習会・相談対応等)、当該取組を行う者への支援 ③関係者による「協議の場」の設置 など (2) 防災・防犯及び緊急の通報(12条) ①障害の種類・程度に応じた迅速・確実な情報取得のための体制の整備充実、設備・機器の設置の推進 ②多様な手段による緊急の通報の仕組みの整備の推進 など (3) 障害者が自立した日常生活・社会生活を営むために必要な分野に係る施策(13条) ①意思疎通支援者の確保・養成・資質の向上 ②事業者の取組への支援 など (4) 障害者からの相談・障害者に提供する情報(14条) 国・地方公共団体について ①相談対応に当たっての配慮 ②障害の種類・程度に応じて情報を提供するよう配慮 (5) 国民の関心・理解の増進(15条) ○機器等の有用性・意思疎通支援者が果たす役割等、障害者による情報取得等の重要性に関する関心・理解を深めるための広報・啓発活動の充実 など (6) 調査研究の推進等(16条) ○障害者による情報取得等に関する調査研究の推進・成果の普及
○障害者基本計画等(障害者基本法)に反映・障害者白書に実施状況を明示(9条) ○施策の実施に必要な法制上・財政上の措置等(10条)	
※施行期日: 令和4年5月25日	

イベント中にアンケートフォームに寄せられたご意見

(順不同／一部、発言者が特定される箇所や地名を修正または記号(＊)で代用。それ以外は原文ママ／太字は文字通研)

利用者	名前を伏せたいわけではありませんが、言いにくい。 最後に出された表で、一人入力とか手書きの場合は要約が目的になると言われたことにひっかかりを感じます。要約はあくまでも手段だと思います。それを目的だと思っている支援者がいるなら意見を聞きたい。
利用者	全要研の考え方は古いと思います。ひと昔前ならば、言葉を文字で伝える、それだけで感謝されたりしていたと思いますが、時代が変わり、女性も男性も高学力を持つようになって、言葉や、文字に対する知識も豊富になりました。その方たちが聞こえくなって、昔の要約筆記では物足りないと感じるのは当然のことで、全要研も時代に合わせて、情報保障の仕方を変えるべきだと思います。全要研の怠慢を感じます。遅れている情報保障者の集団だと思います。そのあたりを政府にもわかってもらうべきです。 署名運動などではできないのでしょうか？
利用者	私自身は、音声認識を使って、きちんと文字が表示できるので、自分のサークルでは音声認識アプリを使っています。ただ、難聴者の言葉すべてがきちんと表示されるわけではないで、会議などは東京都の情報保障の派遣を受けています。 違和感があります。
利用者	全文(整文)表示を望むものです。地元では手書き、要約の力関係が強くPC入力を依頼するにひと手間かける必要がある。 要約筆記のための要約筆記に(自己満足では?)なっているのでは。 現在の要約筆記が地元の市町村の講座で流れる。これを一般市民(加齢性難聴)が見て「なるほど!使ってみよう」と思うだろうか疑問。 難聴者ファーストの支援にするためには全国的な難聴者の声を集めて全難聴、全要研と対話すべきではないのか?局地的な動きでは限界を思う。
入力者	以前から人柄を表現した要約筆記がしたいと感じていたが、できずに悔しい思いをしていました。自分の技能不足のためと思い、精進しているつもりですがなかなか届きません。 冗談を一緒に笑いたい、という声は非常に重いと思います。
入力者	文字通訳新人です。手書き・パソコンともに統一試験に合格しました。 全国の色々について、え?そうなの?・・・対立軸にあるの? という素朴な疑問でした。スキルが無いので 私全文は打てません。手書きならなおさらです。手書きは必要ない?ということかな。 私の中では、どちらも正解だと思っています。利用者さんが好きな方を選べばいいと思います。東京の方でもめているのでしょうか。 名前は出てもかましません、あまりに新人の質問かな?と、チャットしました。 ただ全文文字起こしなら、今ではAIがやってくれるかな?と思うのですが、それでも人がやることの意味はどうお考えですか?
入力者	要約は手段、話に追いつくために要約する、ことを心がけていました。今回まとまった利用者の意見として裏付けられたので、迷わず自信をもって行おうと思いました。 利用者の不満である原文に忠実に表出されない原因ですが、現場で連携入力する立ち場で言いますと、講義で要約技術を学んでいますが、1人入力と違い、連携入力では「要約」は手段ということを教えていないこと、要約筆記者のスキルによりばらつきがあることが原因かな、と思います。

入力者	文字通訳と要約筆記の両方が必要と考えています。 文字を読む速さ（能力）は人によって大幅に違い、例えば、全体投影の画面を斜めに読むような人もいれば、1文字1文字しか読めない人もいます。このような人の中にはTVの字幕を読みきることができない人もいます。 昔は文字通訳と要約筆記を両方提供することは無理でしたが、自然言語処理技術がこの2、3年大幅に進歩したので、文字通訳をベースに機械に要約させれば、両方提供できるようになるのではないかと思います。
入力者	うちの地域では、利用者の高齢化が進んでいるので全文だときついので、要約筆記してほしいという要望が多い。逆に若い人の利用は全くない。全体的に利用数が減っている現状。
入力者	「要約筆記」という名称について。 全文に近い入力という点からすれば、パソコン要約筆記は「文字通訳」の名称がふさわしいと思います。 また、要約筆記を知らない人に対する説明のときも「文字通訳」と言い換えると、一発で理解してもらえます。 手話通訳の認知度が上がっていることを踏まえると、「通訳」という名称をもって「手話通訳」と「文字通訳」が情報保障手段の二枚看板となれば、文字通訳（要約筆記）の認知度向上にもつながるのではないかと思いますし、ぜひそうなってほしいと思います。 養成の部分にも関わってくるかと思いますが、「打てないから要約しよう」「全文入力だと、利用者は疲れるでしょ？ 読めないでしょ？」といった安易な考えを持つ入力者がいるのも事実です。全要研信奉者もいます。往々にして、入力スキルが伴っていない方の言葉です。スキル向上の努力もせずに、（アンケートにもあった）「情報欠落の免罪符」になっていることが残念でなりません。
入力者	私は、2006年から2014年まで**市に登録して活動しておりました。 なので、それ以降の状況は知らない、ということをご承知ください。 当時は、**市の難協が市から委託を受けて、養成・派遣をしておりました。 市の養成講座としては、全要研のテキストを使っていたのですが、パソコンコースでは、独自のテキスト・資料を作成して指導していました。 また登録試験も、独自に作成し、可否の判定は、要約筆者と難聴者で行っておりました。 現場では、連携入力で、全文に近い文章を表示しておりました。
入力者	先ほども質問しました新人です。 **県です。とりあえず名前は伏せます。 **県の場合統一試験を採用していますが、パソコン要約筆記は連携入力です。なぜだかわかりませんが、先輩方がそういう方針ですので、非常に戸惑っている所です。でも連携入力できないと現場に出る機会もほとんどなく、必死でいま連携の練習をしている所です。 指導内容はがつつり全国要約筆記問題研究会、現場は連携、ほぼ全文入力を目指すような状況。 そこに具体的な説明はありません。 でも難聴者からは、全文読んで自分の意見をまとめる、考える暇がない。読むのに精一杯になるから要約して欲しいという声も聴きます。 私は利用者の要望に合わせられれば、それが一番と思いますが、情提の職員さんは、要約筆者より年度が浅く、あまり物が言えません。

	県としての統一見解が出せない状況かとも思います。 県独自で試験なんかしたら、それこそ付度が起きて、故意に合否判断が出そうです。 田舎の方では都会のように利用者也入力者も数が少なく、問題が違うところもあるかと思いますが。文字通研と全要研と二刀流が良いのかな。と。ただ初めからどちらもあるという説明で勉強したいですね。全国要約筆記問題研究会で合格した後、全文通訳では正直戸惑っています。 これは地元の問題でしょうか。
入力者	私も昔、公的派遣の登録者として、要約筆記の現場で、月に10回前後、現場に派遣されていました（その公的派遣では、売れっ子なほうだったと思います）。一人入力（サブあり）の時間交代制を採用していました。ログ提供禁止、連係入力禁止でした（もっというと、単語登録も、みじかく省略して出せるような登録は事実上禁止でした！！）。 さまざまな決まりが合理的と思えずもやもやしながら活動を続けていましたが、結局登録後十数年ぐらいで、辞める結果に至りました。 先ほどの匿名さんのお話を聞いていて思い出したのですが。 私が登録していた自治体の派遣でも、コーディネートは少数の担当者の独断で成されている様子でした。 毎年登録者は微増しているのに、不思議と何年経ってもいつも派遣されるメンバーがほとんど替わらないという有り様、つまり私が重用（？）されている一方で、派遣の場にそもそも関われない入力者がたくさんいたはずです。 想像ですが、コーディネート担当の使いやすい人（反論しない人）を中心に、ラクにコーディネートしているように見受けられました。現場の問題を正確に報告したり、問題意識を解決しようという気概のある人は、そのメンバーに含まれていないようにも見えました。 私の在籍中に、某外資系IT企業の研修会に複数日派遣要請され、対応しましたが、結局利用者からも利用先の企業からも満足を得られず、その後全く呼ばれなくなったということがありました（辞めた後で聞きました）。そもそもメンバーがその派遣で求められるITの基礎的知識がない人がほとんどで、聞き落としが多く、さらに要約（？要約できていたかも疑問ですが）ばかりしていたので、要約文が文章になっていない有様で悲惨でした。ITの研修会で要約しては、情報伝達として不足なのは当然ですね。 意見というより、イベント参加していて思い出したことを、つらつら書いて長くなってしまい、すみません。きりがないのでこの辺でお送りします。
入力者	養成について、参加の皆さんからお声を聞かせてください。 講座の受講生募集にあたり、「1分間に●文字入力できること」という基準は設けられていますか。 私のところでは、基準を設けていません。 要約筆者（指導者）側は基準を設けてほしいとお願いするものの、講座主催者が「基準を設けたら、それがハードルとなって受講生が来ない。受講生が来ないと、行政の補助金が削られる」と言われ、結果、パソコンの操作がおぼつかない方（生涯学習的に来る人）が受講するケースもままあります。 また、全員を修了させることが目的となり、スキルが伴わない方に寄り添って最後まで面倒を見る現場です。 だからといって、その方たちが合格するわけではなありません。

	少数精鋭でもいいので、しっかり合格者を出せるようにしたいのですが、主催者との意識共有ができず、悶々としています。 合格者には「1人入力だから合格できた」という人と「十分入力技術を持った人」の2つに分かれます。 前者は連係入力に適応しにくい、後者は、講座で連係入力の練習をしていなくても、もともとの入力技術があるので、連係技術にも適応する余裕があるように感じます。 だから、個々のスキルに差がありすぎて、入力できる人への負担が大きくなっているのが現実です。 画面上ではちゃんと文字が出ているように見えても、水面下では著しい入力の格差が生じています。
入力者	養成について。講座に人が来てくれません。5人程度いますが、最後まで残るのは1,2人の現状が続いています。
入力者	対話につ対いて。利用者自身がどんな要約筆記がいいかわからない、という意見が多い。してもらっただけでありがたい、と思ってくれるのはいいんだが、やはりもっといいものを提供したいと、こちらから提案すること多い。利用者が声をあげてくれないとどうしようもない。
入力者	地域の現任研修では、ただ講師の話を聞くだけで技術的なことはなしというのが何年も続いている。他地域の現任研修について、私ももう少し知りたいです。
入力者	文字通研の三井さんの話を聞いて。 スキルのある人が少ない県に、スキルのある人が多い県の要約筆記者が、オンラインで情報保障すればいいと思いました。(オンラインで行う情報保障の講座をいま受けています) 養成、試験については、ネットでなんでもどこでも情報を共有できる時代なので、神奈川のやり方がよいのであれば、そのノウハウ、やり方を全国でシェアし展開すればいいのではと思いました。

以上

特定非営利活動法人 全国文字通訳研究会

お問い合わせ先:

FAX 050-3588-8866

メール info@mojitsuken.sakura.ne.jp

ホームページ <https://mojitsuken.sakura.ne.jp/wp/>

※無断転載を禁じます。